

41619

教科書文庫

4
810
41-1941
200030157x

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

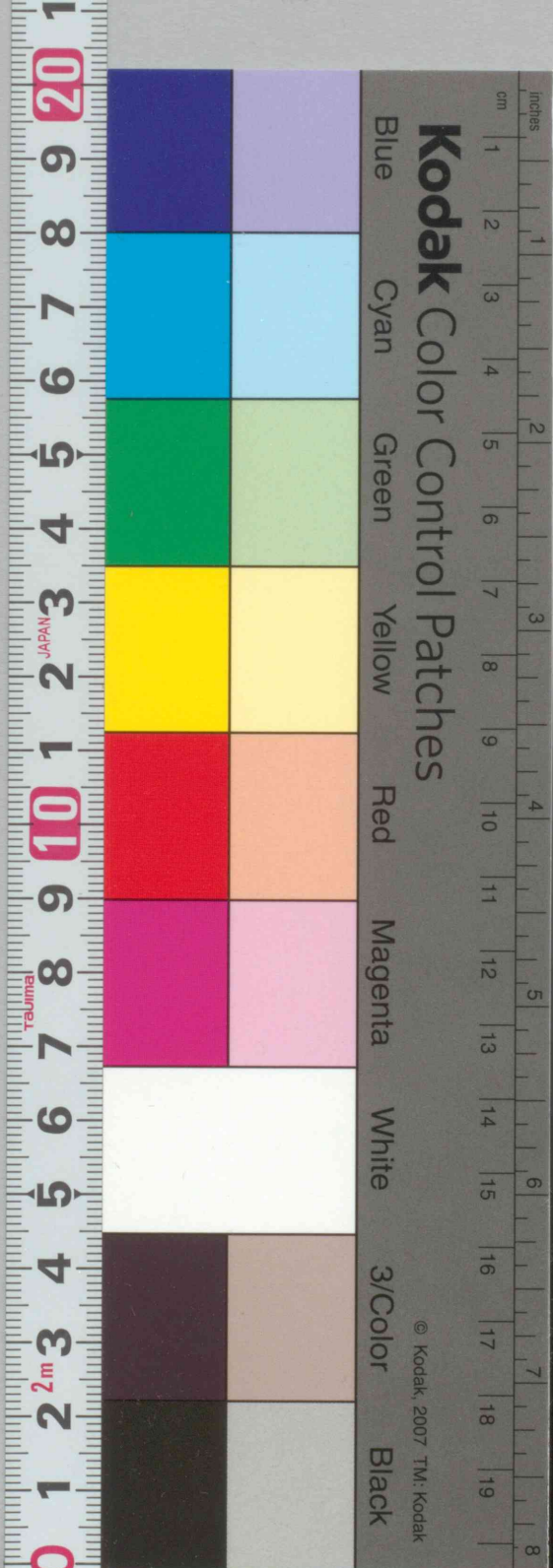


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



紙山園語讀本

改訂版

卷三



教科書文庫
4
810
41-1941
2000301574

濟定檢省部文

用科文漢語國校學中 日一十月九年六十和昭

資 料 室

3759
I91

文學部 力編

紙正國語讀本

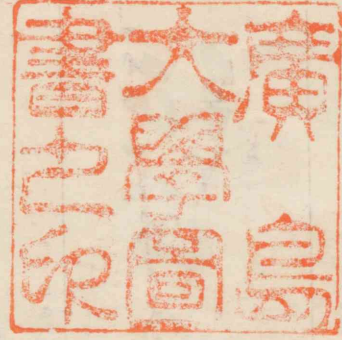
早稲田書局出版社

広島大学図書
2000301574




(照参 ろいろいの花の春)

(筆一抱井酒) 梅 紅



毎月一課ブック読本

卷三 目次

一	春の花のいろく	その一	一	
二	春の花のいろく	その二	六	
三	神風號	内田百間	二	
四	青年と體育	永井 潛據	三	
五	由良の思出	薄田泣菫	三	
六	厨子王	その一	森 鷗外	三
七	厨子王	その二	森 鷗外	四

目次

一

八 読み書きの第一義……………六

九 牛……………六

一〇 俗字と當字……………藤井紫影……………七

一一 富士の大観 その一……………大町桂月……………七

一二 富士の大観 その二……………大町桂月……………六

一三 美しい日本……………山村暮鳥……………七

一四 福澤翁の生家を訪ふ……………九

一五 其の時の怖さ加減……………福澤諭吉……………三

一六 俳句評釋……………正岡子規……………九

一七 宿かりの死……………志賀直哉……………六

一八 鳥島漂流記 その一……………三

一九 鳥島漂流記 その二……………四〇

二〇 海の迷信……………須川邦彦(講演)……………四九

二一 空……………現代歌人……………五九

二二 備後疊……………橘南谿……………五三

二三 大西郷の大度……………勝海舟……………七一

二四 吾が家の富……………徳富蘆花……………七九

二五 國史に返れ……………徳富蘇峯……………八三



百花に魁して霜雪に驕る。

先驅者のさびしさを咲いてゐる。

純正國語讀本 卷三

一 春の花のいろくく その一

春が音づれると、やがて梅が咲きます。梅は百花に魁して霜雪に驕つてゐる所に勇ましい力を現はして居ります。梅は百花に魁して、あの堅く縮まつた姿の中には、時勢に先んじた先驅者の淋しさをも咲いてゐます。青い、遠い、寒さうに澄んだ空と、ぞくぞくする霜柱に皮膚の表面のくづれかゝつた大地との間に、落葉木は骨立し、常磐木は常磐木いぢけて堅くなつてゐる。

一 春の花のいろくく その一

寒さといふ敵を防ぐかの如く。

疎影横斜のすねぶり。

歴史の一部、人生の一面を咲いてゐる。

間に、小さく離れぐに咲いた紅い白い花の姿は、何といふ淋しさでせう。他の樹木と調和せぬやうにギクシヤクした全體の木ぶり、寒さといふ敵を防ぐかの如く、幹から枝、枝から小枝と、垂直の撞木枝を出した間に、幹に枝に小枝に引附いて堅くなつて咲いてゐる花の姿は、櫻が十分に枝を伸ばし、花瓣を伸ばして繚亂と咲き亂るゝ賑かさに比べて、何といふ淋しさでせう。枝と枝と親しまず、花と花と親しまずして、我れを我れと立てようとする疎影横斜のすねぶりは、何といふ意味の深い淋しさでせう。私は梅に於いて、眞冬の水の中に堅くなつて垢離を取る聖者の姿を思ひ浮かべます。梅の花は渺たる影の裡に美しくも歴史の一部、人

優しい姿を見せる。

生の一面を咲いてゐます。

梅について優しい姿を見せるのは水仙です。初めには鞘のまゝ霜柱の間に顔を出して、外面の寒さに身を馴らす如く、少しづつ少しづつと大きくなり、やがて鞘を破つて中啓のやうな數枚の長い葉を現はし、その間から長い莖を立て、其の尖頭に蘭のやうな仙人めいた品のよい花をつけます。水仙には梅を草花にしたやうな姿があります。あたりに仲間がないかと顧みるやうな様子をして、寒い天地に獨りぼっちの綺麗な花を咲いてゐる所は、何といふ俗ばなれのした優しさでせう。

あたりに仲間がないかと顧みるやうな様子。

椿は、葉も、花も、幹も、堅いがつしりした、是非とも寒い中に

人の心を面白く
咲く。

外の寒氣に探り
を入れる。

咲かなくては濟まないやうな花であります。あの花瓣と
花瓣とが抱き合つて暖を取る様子、寒い中は葉陰に咲いて、
暖かくなるに従つて段々と葉の外に顔を出して咲いて來
るあたり、どこまで人の心を面白く咲いて居るのでせう。
やがて芍薬が芽を出します。初めには鳶色の堅い芽を
出して、外面の寒氣に探りを入れるかの如く、暫らく待つて、
やがて賑やかな艶のある葉を擴げ、團子のやうな堅い蕾に、
しばらく人をもどかしがらせて後に、多量の美人富貴の姿をゆたかに
現はした大きな花を見せて呉れます。

チューリップも亦面白い。秋の彼岸時分一二寸の深さ
に植ゑて、上に厚く馬糞をかけておくと、その馬糞が半年の

清く瘦せた、風
にも堪へぬやう
な姿。

花数の多きを食
らずして、一年
に一輪で満足す
る氣高さ。

露霜に曝さられて綺麗な藁の纖維のやうになる、その纖維をか
き分けて羞耻はにかむやうに細やかな芽を現はし、やがて長い花
首の上に虞美人草をそのまゝ大きくしたやうな一つの花
をつけます。あの清く瘦せた、風にも堪へぬやうな姿を、何
に譬へませう。花数の多きを食らずして、一年に一輪で満
足する氣高さを何に譬へませう。

をかしいのは鯛釣草です。藤牡丹とも申します。牡丹
そつくりの柔かい葉の間から、藤の花を斜めに釣竿形にし
たやうな長い莖を出して、莖の先がしだれて、其處に鯛の様
な淡紅い花のぶら下つて咲いて居る所は、まるで惠比須様
の鯛釣り其のまゝです。莖の伸びると共に、段々先へく

と咲き進んで、百日ちかく咲いて居りますが、後には色が褪せて、鰯を並べて吊したやうになつて、命長き者の耻を思はせませす。

二 春の花のいろく その二

春が進むにつれて高い空が段々に低くなつて來ます。澄んだ空が段々に霞んで來ます。春温を傳へる水氣が、野にも、山にも、木にも、草にも、限なく行きわたつて行くのです。花曇の空は春の光の最も濃くなつた匂ひでありませう。花曇の淡紅い色は、やがて新しい葉の鮮かな緑の世となり

高い空が段々に低くなつて來る。

命長き者の耻を思はせませす。

ます。花の時代が葉の時代になるのです。かくして春はいつの間にか薄暗い雨の間に其の影を隠します。

春の姿を最もよく現はすものは櫻であります。あの天地を狭く爛漫と咲き亂れたところは、春の御代の眞盛りを思はせるではありませんか。冬を我が世と勝ち誇つた常磐木を後ろに廻し、其の黒い色を背景として、目の覺めるやうな派手姿を現はした趣は、冬を壓した春の力を語るものではないませんか。眩しい盛りを三日に見せ、やがて風を白くし土を雪にして、綺麗な花葩を八方にまき散らす趣は、春の喜びを世の隅々まで傳へるやうではありませんか。眞盛りに於いては春の美しさの標章となり、潔く散つては

冬を我が世と勝ち誇つた常磐木を後ろに廻し、其の黒い色を背景として、目の覺めるやうな派手姿を現はした趣は、冬を壓した春の力を語るものではないませんか。風を白くし、土を雪にする。

春の福音の宣傳者。

春の福音の宣傳者となる者は櫻です。一月の始めから三月の終りまで、道開きの序幕は、すっかり身内の小さい花に任せておいて、睡つたやうに形を潜め、一夜に野山を蔽ふ白雲を棚引かして春の威力を現はすものは櫻です。彼女は三日の美觀の爲めに三百六十二日を犠牲にして惜しみません。而して一たび自分の役目を済ませば、後繼の事などは意にも介せぬやうに、さつくと去つてしまひます。私は櫻に對する歎美の辭を知りません。

西行法師は、たぐひなき花を木はめつたに花を枝に咲かせるのひに櫻にまさる木ぞなかりける。と申しました。活花師は櫻を花の王と崇め、これには鋏刀さきを入れぬものとして特別扱ひをして居

西行
鎌倉時代の歌僧
俗名佐藤義清
建久元年歿
年七十三

天下を春とする
三日の花盛り。

向上の努力を大儀がつてダラリと晝寢をしてゐるやうな有様。

地べたを美化する優しい花。

ります。櫻は花が散る匆々きまつて夥しい毛蟲が湧きまゐります。秋は落葉を掃ふの煩はしさに堪へません。冬のばさけた枯木姿には、更に趣がありません。けれども彼女は天下を春とする三日の花盛りによつて、あらゆる短所を蔽ふことが出来まゝす。

櫻がすめば藤。紫に白、品位のある色を備へながら、向上の努力を大儀がつて、ダラリと晝寢をしてゐるやうな有様は、疲れた春の姿とも申しませうか。藤の花の返り咲きに限つて、上向きに咲くのは、どういふ心でせう。

躑躅は地べたを美化する優しい花です。見ばえのある空の方を飾る役目は、他の大きな木に任せておいて、わたし

彼女は私共が與へた滋養物の多少に従つて、現金に花の數と艶とを加減する。

はお前達の足許のアラを隠して上げませう。」といふやうな、あの謙遜な親切な姿は、私に取つて何より嬉しく思はれます。杜鵑の吐いた血だといはれるあの濃い紅の花が、目のつんだ濃緑の間に浮いて、地上の星のやうに見えるのも美しい眺めです。躑躅ほど寒肥を求めるものは多くありません。彼女は私共が與へた滋養物の多少に従つて、現金に花の數と艶とを加減します。躑躅の根も枝のやうに込み合つて塊をなしてゐます。従つて幾度移しても平氣ですが、根を強く固めると花を持ちません。「わたしの身體の機關は微妙に出來てゐます、どうぞそつとしておいて、自由に私の咲きたいやうに咲かして下さい。」といふ心ではないで

せうか。

〔野草集〕

三 神風號

内田 百間

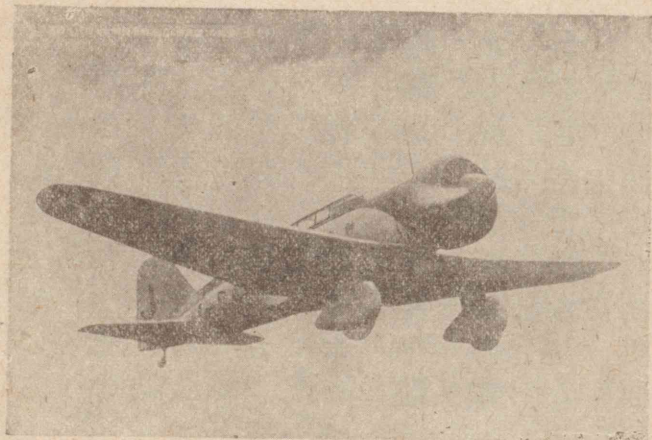
神風號
國産新飛行機、
昭和十二年四月
飯沼操縦士、塚
越機關士搭乗、
東京からロンド
ンまで九十四時
間七分五十六
秒で翔破して世
界記録を作つ
た。

内田百間
元陸軍教授、海
軍教官、隨筆家
岡山縣の人
明治二十二年生

四月九日の晩、夕食の後暫く自分の部屋に坐つてゐたが、どうも落ちつかかなかつた。朝日新聞社の神風號が夜半に倫敦のクロイドン飛行場に著く事になつてゐるので、その事が氣になつてちつとしてゐられない。到頭思ひ切つて、これから東京朝日の航空部に出かけるから、袴を出せと言つたら、家の者達は随分物好きもあつたものだと言つたが、歸りはどうせ夜半過ぎになるだらうから、先に寝る様に言

挑桃
向う(ふ)

つて、昨夜からの雨が降り止んだばかりの暗い往來に出た。道端で拾つた自動車の運轉手は、行先を聞くとすぐ神風號の噂を始めた。二三日前にもどこか外へ行つた自動車の中で、矢張り運轉手が同じ様な話を持ちかけて、私が知つた様な受け答へをしたら、向うに著くまで飛行機の話を止めなかつた。今度の事は、世界の記録に挑戦する日本の選手といふ關心の外に、案外の人までが、飛行時間の豫想の懸賞に應募してゐるらしいので、運轉手がその話に夢中になるのも、さういふわけがあるので、ではないかと私は想像した。しよつちゆう私のところに来る若い連中は、大概飛行機に乗つて居り、中には操縦士の免狀を持つてゐるのも二三



飛行機の話をしてくれる様になればいゝと願つてゐる。

神風號

人ゐるが、さうでないのでも今度の飛行には大分興奮してゐる様であつた。その結果、所要時間の豫想を出したのか、或は懸賞に應募した爲に、特に關心を強めて來たのか、それは解らないが、人の顔を見ると飛行機の話をするのは珍しい事であつた。私などは學生航空に携はつた關係上、もとから飛行機が好きなので、いづもかういふ風に世間の人々が

携 是 操 縦 士 挑 戰 夢

くら。
員(負)

みんなの話聞いてみると、一人で葉書一枚の応募をしたものは殆ど無いらしく、大概五通から十通ぐらゐ出してゐると言つた。その中の一人の知り合に或會社の社員があつて、その男は一人で百枚応募したさうだといふ話をしたので、私は驚いた。實は私も応募した一人であるが、しかし一枚しか出さなかつた。その話をしたら、みんなが意外な顔をしたが、年甲斐もないと思つたのかも知れない。しかし私は眞面目に考へたのであつて、もし當つたら、世間がうるさくて困るだらうといふ事まで心配した。

私の豫想した所要時間は、五十七時間零分零秒であつて、誰でもそれは無理だと言つたが、私も少し無理な事は承知

してゐるけれども、最もいゝ條件が備はつたら、出来ない事もないと考へた。無論計算はしたのであつて、出鱈目ではなかつたつもりである。

しかし飛行場に行つてゐる連中は、私の時間を無謀だと言つて頻りにけなした。僕達は地圖に物差しを當てて計算したので、先生の様な時間は出ツこありませんと言つた。

無謀 出鱈目 甲斐 応募

僕の意味は少し違ふと私が言つた。僕はこれこれの時間で飯沼塚越兩君が飛ぶであらうといふ事を考へて見たのでなく、これだけの時間があれば飛べる筈だから、その時間内に飛んで貰ひたいといふこちらの考を先方に通じた

牌一碑、稗、裨
載一載

コスト・ルブリ
フランスの飛行
家

六十時間を割る
位の記録で飛ん
で、開いた口が
當分ふさがらぬ
様な目に合はせ
てやりたい。

私の壯圖は……
第一日の蹉跌で
畫餅に歸した。

のであつて、それで飛べたら賞牌も賞金も芽出度く頂戴するが、ただらだと八十時間も百時間もかゝるのだつたら、金牌と千圓を持つて來ても貰つてやらない。世界記録を破ると云ふだけの事なら、コストルブリの東京巴里間飛行は百六十四時間だから、百五十時間でも、百六十時間でもまだ充分に新しい世界記録となる。さういふものを目標としないで、どうせ世界をおどろかす以上は、六十時間を割る位の記録で飛んで、開いた口が當分ふさがらぬ様な目に會はせてやりたい。

しかし私の壯圖は、神風號が立川飛行場を離陸したその日のうちにカルカツタまで行かれなかつたと云ふ第一日

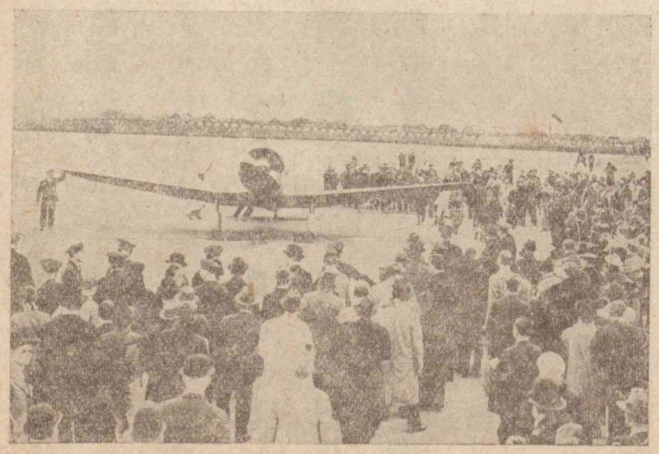
賞牌 賞金 賞状

畫(畫、画)

穴のあく程讀み
耽つた。
耽・更

……と考へるよ
りも……と思ふ
方が私には切實
である。

の蹉跌で畫餅に歸した。しかしその後のコースは、私の希望と離れたとしても、先づく順當に飛んでゐるらしいので、朝晩の新聞と、時々配つて來る號外を待ち兼ねて、私は穴のあく程讀み耽つた。家にはラヂオを引いてゐないから、新聞より外に消息を知る事が出來ないのである。ラヂオがあつたら便利だらうと考へるよりも、ラヂオがあつたら一日ちゆう落ちついてゐられないだらうと思ふ方が私には



那利の陸着場行飛ンドイログ

五神風號

蹉跌 希 一七

切實である。もしラヂオがあつたら、今晚もかうして出かけては來なかつたに違ひないから、結局ラヂオのない方が、物事が大袈裟になつて面白いと自動車の中で考へた。

朝日新聞社へ行つて、航空部の部屋に上がつて見ると、遞信省の航空局や、飛行協會の、矢張りちつとしてゐられないらしい諸氏が大分詰めかけてゐた。羅馬を出て、まだ巴里に著かない間の時間だつたので、地圖を見たり、時差表を廻したりしながら、みんなて閑談した。

巴里著が少し遅い様だと、みんなて氣を揉んでゐる内に電話が來た。巴里から十五分もかゝつてゐないらしい。

やはりちつとしてゐられないらしい諸氏が大分詰めかけてゐた。

ち(じ)つと

時間が近いので、今向うのルブルジェ飛行場でやつてゐる騒ぎが、すぐ目の前に見える様な氣がする。

だから矢つ張りかうして電話口に近い所に出張して來た方が面白いと思つた。時間が近いので、今向うのルブルジェ飛行場でやつてゐる騒ぎが、すぐ目の前に見える様な氣がする。

その頃から、朝日新聞社のまはりを取り巻いてゐる群衆の喊聲が段々騒々しくなつて來た。部屋の中にある人々も、その聲に釣られて落ちつかなくなつた様で、頻りに窓を覗き、又部屋を出たり入つたりして、中には涙聲になつてゐる人もある。まあ一寸來て御覽なさいと言つて私を引つ張つて行つた人は、四階の窓から聲を絞つて、下の群衆に萬歳、萬歳と呼應した。

釣—釣、鉤

絞—絞

數寄屋橋の上にも一かたまりゐたが、日本劇場の側にはもつと澤山ゐた様である。まだ雨の乾かない薄寒い往來に立つて、旗を振つたり、提灯を差し上げたりしてゐる。さうして時々わつ、わつと喊聲を上げた。その氣勢に誘ひ込まれて、何だか大變な瞬間が迫つてゐるといふ氣がし出した。

航空部の机の上の受話器に掛かつてゐた人が、巴里を立ちましたと言つた。あたりの人がみんな立ち上がる様な氣配を感じた。もう後は三百五十幾軒である。一時間かかるか、掛からないかであらう。しかし、巴里發がこちらの

時間で午後十一時十六分であつたから、十二時までには倫敦に著く事は不可能と思はなければならぬ。航空本部の少佐某氏はそれが残念だ、残念だと言ふので、傍の人が何故ですかと聞いたら、十二時を一分でも過ぎれば、この飛行が五日目にかゝる事になる。總計の飛行時間も大切だが、四日の内に倫敦に著いたと言ひたいではありませんかと云つたので、成る程と思つた。

表の群衆の聲が段々大きくなつて來る様であつた。方方で何だかいろんな音がし出した様に思はれて、ちつとしてゐられない。その内に十二時を過ぎて、開け放しになつ

開け放しになつてゐるラヂオが何か言ひ出した。著(着)

何かゆらくする様な氣持がすると思つたら、外で人の聲が波の様に揺れてゐるのであつた。それが、君が代の合唱であるとな氣がついたら、不意に全身がぞうツとする様な氣持がした。

てゐるラヂオが何か言ひ出した。まだ倫敦に著いたと申し上げられないのが残念だと言ふのが聞えた。倫敦に著いたといふ電話を聞いたのは、何時何分であつたか覚えてゐない。いきなり大きな聲があつちこつちで聞えたり、ばたくといふ足音が階段を馳け上がつたりした。何かゆらくする様な氣持がすると思つたら、窓の外で人の聲が波の様に揺れてゐるのであつた。それが、君が代の合唱であるとな氣がついたら、不意に全身がぞうツとする様な氣持がした。部屋にゐる人々と心からの祝杯を舉げた。私ぐらゐの歳になつて、かういふ事にこれ程の純粹な歡喜を感じる場合

合は滅多にないであらう。

〔隨筆新雨から〕

四 青年と體育

青年は人生の春である。私は、花咲き鳥啼く春の盛りに於いて、元氣旺盛なる青年諸君の爲めに體育を論ずる事を、無上の欣快とする。

二千五百年の昔、希臘民族は、世界人類の選手として、燦爛たる文化を創建した。しかしながら彼等が文化の花を咲かせる迄には、どれほど恐ろしい試鍊に打勝つたことであらう。彼等は先づマラソンの野に、勝ち誇つたダーリウス

希臘民族は、世界人類の選手として、燦爛たる文化を創建した。
マラソン
ギリシアの地名
西紀前四九〇年
アテネ軍大いに波斯軍を敗る。

希臘民族

四 青年と體育

燦爛 創建 二二 希臘民族

大腹

要震 陸地 衛所 累卵

賜 煎

憧憬

ダーリウス (前521-485) 波斯王

サーモビレ

ギリシアの地名
スパルタ王レオニダス波斯軍と戦ひて之れを敗る。

クセルクセス

(前485-465) 波斯王

ダーリウスの子

輕軻を放ち敵の巨艦を衝く。

彼等はいくして希臘を累卵の危きに救つた。

サラミス

ギリシアの灣の名、こゝにてアテネのテミストクレス波斯艦隊を破る。(前480)

の軍勢を破つた。二度目には、サーモビレの天險に、クセルクセスが雲霞の如き大軍を扼した。三度目にはサラミス灣頭に輕軻を放ち、敵の巨艦を衝いて、再び起つ能はざらしめた。彼等はいくして希臘を累卵の危きに救ひ、同時に人類の文化の爲めに、向上の一路を開いたのであるが、彼等がこの光榮ある勝利は、煎じつめると、希臘青年の眞の體育の賜に外ならなかつたのである。

希臘人は體育を重んじた。彼等にとつては、體育が教育の中に最も重きをなして居たと云ふよりも、寧ろ體育即ち教育の觀があつた。本來、眞善美を憧憬することが、人間の貴き本性であり、斯の本性を助長することが、教育の根本義でなければならぬのは、言ふを待たないことであるが、希臘人は、體育によつて此の根本義に副うた眞の教育を行はうとしたのである。

希臘の國民は常に美に憧れ、調和を悦んだ。而して特に人體美に於いて、美の極致が具象化されて居ることを看取した。彼等が全智全能の神々を表はすに、奇怪の形相を假らずして、美なる人體を以てしたのも、全く其の爲めであつた。従つて美なる人體を假りたるが爲めに、彼等の作が不朽の價値ある大藝術として、今猶ほ稱へられて居るのである。彼等が體育の法として、裸體になり、油を塗つたのも、一つは皮膚を鍛錬せんが爲めであつたが、其の主なる目的は、

希臘の國民は人體美に於いて、美の極致が具象化されて居ることを看取した。

不朽の價値ある大藝術。

種 林

人體美を鑑賞せんが爲めであつた。今日體操の事をギムナスチックといひ、中學校の事をギムナヂウムと云ふのも、畢竟希臘語のグムノス即ち裸體と云ふ語原から導かれて來たのである。

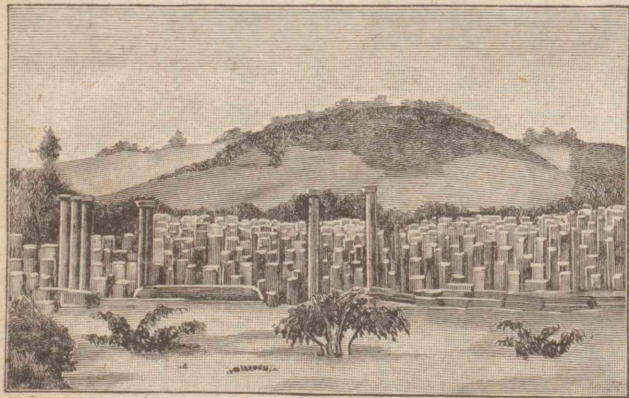
希臘人の正義を尊び、榮譽に憧るゝ心は競技を喜ぶ行動となつて現はれた。競技には、權威もなく、門閥もなく、財力もなく、情實もない。競技は全く裸一貫の體と體力と力とが火花を散らしてぶつかり合ふのである。眞に強き者が勝ち、弱き者が負けるのである。美を悦び正義を愛する希臘民族が、斯の至純至眞にして公明正大なる眞劍味の勝敗から、どれ程大いなる喜びを得たことであらう。

競技には權威もなく、門閥もなく、財力もなく、情實もない。競技は全く裸一貫の體と體力と力とが火花を散らしてぶつかり合ふのである。

畢嘉

運動競技位人をして平等一如の氣分に浸らしめるものはない。観る者観らるゝ者悉く同一の興味と趣好とに溶け合ふ。

希臘の文化の基調を成して居るものは、デモクラチックの精神であるが、運動競技位人をして平等一如の氣分に浸らしめるものはない。競技の前には、観る者も、観らるゝ者も、悉く同一の興味と趣好とに溶け合ふてはないか。其處には身分の高下もなく、職業の差別もなく、年齢の相違もなく、あらゆる反目も障壁も、清い温かい享樂の中に消え去つてしまふてはないか。しかも闘士が血湧き肉躍る懸命の競



墟廢場技競ヤピンリオ

享樂 障壁

闘士

堅唾を呑み、息を凝らす。

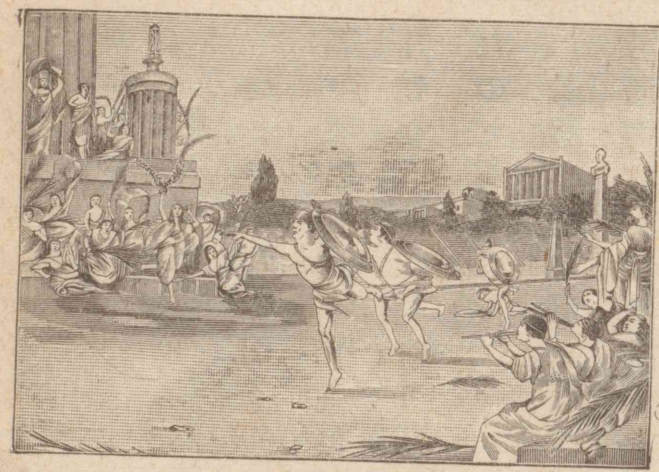
世間的の利害、得喪を超越し、眞純無垢の情緒の流露した光景。

争の中に、美しい意氣や、友情や、謙讓の美德が、自然に溢れ出でて人を魅するではないか。

試みに競技の光景を想像して見るがよい。まづ、満場闐として聲なく、觀衆が堅唾を呑んで、息を凝らして控へて居る。やがて、選手が幾千の應援者、幾萬の觀客の前に、凜々しく立ちならぶ。やがて、應援者は選手の心を汲み、選手は應援者の心に感激しつゝ、こゝに壯烈なる競技が始まる。かくして行はるゝ競技である。勝つも涙である。負けるも涙である。闘ふ者も涙である。觀る者も涙である。此の世智辛い世に於いて、世間的の利害、得喪を超越した、かやうな眞純無垢の情緒の流露した光景に接するのである。こ

れがあれば程美を愛した國民に、どれ程深き満足と慰安と向上の動機とを與へたかは察するに餘りがある。

オ
リ
ン
ピ
ヤ
の
競
争
競技に個人的と團體的との區別がある。而して個人と個人とが兩々相對立して鎗を削る場合に於いては、電光石火、寸分の隙も許されない。従つて其の間に機敏、果斷、克己、忍耐、廉恥、勇氣、努力等の徳性を養ふことが出来る。又團體競技に於いては、協同、一致、規律、節制、公明、



兩々相對立して鎗を削る場合に於いては、電光石火、寸分の隙も許されない。

正大、責任、義務等の觀念を養ひ、同胞感を高調せしむることが出来る。

其の理想を心ゆくばかり現實にした。

希臘人はかやうな意味から、體育の中でも、殊に競技に重きを置き、オリムピック、ゲームを以て眞善美を憧憬する彼等の理想生活の中心としたのであつた。而して又此の有
力なる手段によつて、其の理想を、心ゆくばかり現實にし得たのであつた。

高遠なる理想、光榮ある實行。

希臘の昔に於いてはまさにかうであつた。しかしながら、體育に於ける斯の高遠なる理想も、光榮ある實行も、今は昔の夢となつた。體育は、希臘の末期から羅馬の盛時にかけて、滔々として墮落した。而して其の唯一の原因は、人々

技巧の末に走り、勝敗の數に囚はれ、享樂の氣分に溺る。

が體育の目ざすべき高遠なる理想を忘れて、徒らに技巧の末に走り、勝敗の數に囚はれ、享樂の氣分に溺れ、其の結果一般的アマチュアの體育が廢れて、職業的觀せ物的の運動となつたことであつた。斯くして體育は全然眞の目的から離れて、祖國の自由獨立の爲めでもなく、眞善美の追求、人格陶冶の爲めでもなく、單に一時的の享樂や賭事の具に供せらるゝやうになつたのである。

祖國の自由獨立の爲めでもなく、眞善美の追求、人格陶冶の爲めでもなく、

今や我が國の體育は世界の趨勢に伴つて、著しく勃興して來た。これはまことに喜びに堪へないことであるが、しかしながら、徒らに肉の爲めにする體育、勝たんが爲めの體育、享樂の爲めの體育は、今より斷乎として之れを排斥せね

ばならぬ。同時に常に體育道の大精神を服膺して、眞善美を追求する心の奥底から迸り出づる眞劍味の體育を實行しなければならぬ。斯くして始めて、勝敗を争うて勝敗に囚はれず、技術を練磨して技術に走らず、興味を樂しんで興味に溺れず、眞に人をして人たらしむる所以の體育を實現する事が出来るのであらう。

(永井潛の文に據る)

永井潛
生物學者
醫學博士

薄田泣菫

詩人
大阪毎日新聞社
社友
名は淳介
岡山縣の人
明治十年生

五 由良の思出

薄田 泣菫

春の夜はしづかに更けぬ。
はゆま路の並木のけぶり、

をどり

箱馬車は轍をどりて、
宮津より由良へ急ぎぬ。

人の世の旅の道
づれ。

朧夜の窓のあかりに
京むすめ、難波商人、
朽尼や、切戸まうでや、
人の世の旅の道づれ。

おくびまじり、

物がたりおくびまじりに、
眠り目のとろむとすれば、
誰が子にかしりへの方に、

五 由良の思出

清らなる聲。
さゝら水なみ。

をりからの追分節や。

清らなる聲ひとしきり、

溪あひのさゝら水なみ、

咽び音に響きわたれば、

乗合は涙こぼれぬ。

月落ちて闇の夜ぶかに、

箱馬車は由良へとゞきぬ。

客人は車をおりて、

西東みちに別れぬ。

春夏秋冬
一年

過去推量

えこそ忘れぬ。

ぬぬらす

人々の心に生きて、
とことにはに
姿ぞわかき。

その後や幾春へけむ、

おほかたは夢にうつゝに、

しのびてはえこそ忘れぬ、

由良の夜の追分上手。

その子いま何處にあらむ、

思ひでの清きかたみや、

人々のこゝろに生きて、

とことにはに姿ぞわかき。

〇一十五終

六 厨子王 その一

森 鷗 外

森鷗外
明治大正の文學者
文學博士
醫學博士
陸軍々醫總監
帝室博物館總長
名は林太郎
島根縣の人
大正十一年歿
年六十三

あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ腰に鎌を挿して、手を引き合つて木戸を出た。山椒大夫の所に來てから、二人一しよに歩くのはこれが始めてである。

厨子王は姉の心を忖り兼ねて、寂しいやうな、悲しいやうな思ひに、胸が一ぱいになつてゐる。きのふも奴頭の歸つた後で、いろ／＼に詞を設けて尋ねたが、姉はひとりで何事をか考へてゐるらしく、それをあからさまには打ち明けずにしまつた。

あからさまには打ち明けずにしまつた。

山の麓に來た時、厨子王はこらへかねて云つた。「姉さん、わたしはかうして久し振りで一しよに歩くのだから、嬉し



森 鷗 外

がらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはかうして手を引いてゐながら、あなたの方へ向いて、その禿になつたお頭を見ることが出來ません。姉さん。あなたはわたしに隠して、何か考へてゐますね。なぜ、それをわたしに言つて聞かせてくれないのです。」

安壽はけさは毫光のさすやうな喜びを額に湛へて、大きい目を輝かしてゐる。

安壽はけさは毫光のさすやうな喜びを額に湛へて、大きい目を輝かしてゐる。併し弟の詞には答へない。只だ引き合つてゐる手に力を入れただけである。

その中に去年柴を刈つた木立の邊に來たので、厨子王は足を駐めた。「姉さん。こゝらで刈るのです。」

「まあ、もつと高い所へ登つて見ませうね。」安壽は先に立つてずん／＼登つて行く。厨子王は訝りながら附いて行く。暫らくして雑木林よりは餘程高い、外山の頂とも云ふべき所に來た。

石浦 丹後國加佐郡由良町字石浦
由良の湊 舞鶴と宮津の中間にある小港

安壽はそこに立つて、南の方をじつと見てゐる。目は、石浦を経て由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり

大雲川

由良川ともいふ福知山の方から來て、由良の港に注ぐ。

中山

大雲川の右岸
由良の南四軒

り隔つた川向に、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山に止まつた。そして「厨子王や。」と弟を呼びかけた。

筑紫へ往くのはむづかしいし、引返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれませう。恐ろしい人には

「わたしが久しい前から考へ事をしてゐて、お前ともいつものやうに話をしないのを、變だと思つてゐたでせうね。もうけふは柴なんぞは刈らなくても好いから、わたしの言ふ事を好くお聞き。あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。おかあ様と御一しよに岩代を出てから、わたしどもは恐ろしい人にはかり出逢つたが、人の運が開けるものな

かり出逢つたが
人の運が開ける
ものなら、善い
人に出逢はぬに
も限らない。

ら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、此の土地を逃げ延びて、どうぞ都へ上つておくれ。神佛のお導きて、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたお父様のお身の上も知れよう。佐渡へお母様のお迎へに往くことも出来よう。籠や鎌は棄て、置いて、櫛子だけ持つて往くのだよ。」

お前一人です
事を、わたしと
一しよにするつ
もりでしておく
れ。

厨子王は黙つて聞いてゐたが、涙が頬を傳つて流れて來た。「そして、ねえさん、あなたはどうぞと云ふのです。」
「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにするつもりでしておくれ。お父様にもお目に掛かり、お母様をも島からお連れ申しに上で、わたしをたすけ

に來ておくれ。」

「でも、わたしがあなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。」厨子王が心には、烙印をせられた、恐ろしい夢が

春廻、乃刀丘男毛

之樂豆鯨捕留物語

沢入沙農上能舟

高港

わたしを二人前働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の所で、わたしは柴を澤山刈ります。六荷まで

春の夜をあくるも
知らず鯨捕る物語
きく砂の上の舟
高港

浮かぶ。

「それはいぢめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買った婢を、あの人達は殺しはしません。多分お前がなくなつたら、

は刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さあ、あそこまでおりて行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」

かう云つて安壽は先に立つておりて行く。

厨子王は何とも思ひ定めかねて、ぼんやりして附いておる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早く大人びて、その上物に憑かれた様に、聴く賢しくなつてゐるので、厨子王は姉の詞に背くことが出来ぬのである。

木立の處までおりて、二人は籠と鎌を落葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、今度逢ふまでお前に預けます。此の地藏

ものに憑かれたやうに聴く賢しくなつてゐるので。

護刀

様をわたしだと思つて、護刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ。」

「でも、ねえさんにお守がなくては。」

「いゝえ、わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないときつと討手が掛かります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追ひ附かれるに極つてゐます。さつき見た川の上手を和江と云ふ處まで往つて、首尾好く人に見附けられずに、向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えるたお寺に這入つて隠しておもらひ。暫らくあそこに隠れてゐて、討手が歸つて來たあとで、寺を逃げて

和江
大雲川の左岸
中山の向ひ
由良の南四軒

ねえさんの今日
おつしやる事
は、まるで神様
か佛様がおつし
やるやうです。

お出で。」

「でもお寺の坊さんが隠して置いてくれるでせうか。」

「さあ、それが運だめしだよ。開ける運なら、坊さんがお前を隠してくれませう。」

「さうですね。ねえさんの今日おつしやる事は、まるで神様か佛様がおつしやるやうです。わたしは考を極めました。なんでもねえさんのおつしやる通りにします。」

「おう、好く聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隠してくれます。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。

逃げて都へも往かれます。お父様やお母様にも逢はれま

す。姉さんのお迎へにも來られます。」

厨子王の目が姉と同じ様に輝いて來た。

「さあ、麓まで、一しよに行くから、早くお出で。」

二人は急いで山をおりた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持が、暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の湧く處へ來た。姉は標子（まねこ）に添へてある木の椀（わん）を出

して、清水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」

かう云つて一口飲んで弟にさした。

弟は椀を飲みほした。「そんなら姉さん。御機嫌好う。

きつと人に見附からずに、中山まで參ります。」

椀

姉の熱した心持
が、暗示のやう
に弟に移つて行
つた。

一走到に駈けお
りる。

並木の松に隠れ
ては又現はれる
後影。

厨子王は十歩ばかり残つてゐた坂道を一走りに駈けお
りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ
向かつて急ぐのである。

安壽は泉の畔ほとりに立つて、並木の松に隠れては又現はれる
後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近
づくのに、山に登らうともしない。幸に今日は此の方角の
山で木を樵きる人がないと見えて、坂道に立つて時を過ごす
安壽を見咎めるものもなかつた。

後に同胞ほんぱうを捜しに出た山椒大夫一家の討手が、此の坂の
下の沼の端はたで、小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履
であつた。

山椒大夫
由其の石浦にぬ
た長者。

七 厨子王 その二

森 鷗 外

中山の國分寺の三門に、松明の火影まが亂れて、大勢の人が
籠み入つて来る。先に立つたのは、白柄しろがらの薙刀かみばなを手挾んだ、
山椒大夫の息子むすこ三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に云つた。「これへ參つたの
は石浦の山椒大夫が族うぢらの者ぢや。大夫が使ふ奴やつこの一人が
此の山に逃げ込んだのを、慥たしかに認めた者がある。隠れ場は
寺内より外にはない。すぐにこゝへ出して貰はう。」附い
て來た大勢が、「さあ、出して貰はう、出して貰はう。」と叫んだ。

國分寺
中山にあつたと
いふ。

手に手に松明を
持った三郎の手
のもの。
境内に住んで
る限りの僧俗。

本堂は戸を閉ぢ
たま、暫らく
の間ひつそりと
してゐる。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。其の石疊の上には、今手にく松明を持った三郎の手のものが押合つてゐる。又石疊の兩側には境内に住んでゐる限りの僧俗が、殆んど一人も残らず簇つてゐる。これは討手の群が門外で騒いだ時、内陣からも、庫裡からも、何事が起こつたかと怪しんで出て來たのである。

初め討手が門外から門を開けいと叫んだ時、開けて入れたら亂暴をせられはしまいかと心配して、開けまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師が開けさせた。併し今、三郎が大聲で逃げた奴を出せと云ふのに、本堂は戸を閉ぢたま、暫らくの間ひつそりとしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰返した。手のものの中から「和尚さん、どうしたのだ」と呼ぶものがある。それに短い笑聲が交る。

やうくの事て本堂の戸が靜かに開いた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い巖疊な體と、眉のまだ黒い廉張つた顔とが、揺らめく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師は徐に口を開いた。騒がしい討手の者も、律師の姿を見ただけで黙つたので、聲は隅々まで聞こえた。「逃げた

徐 眉 偏衫 纏

丈の高い巖疊な體と、眉のまだ黒い廉張つた顔とが、揺らめく火に照らし出された。

劔戟

叛逆

金泥

結

勅願の寺院。
宸翰金字の經文。
狼藉を働く。

下人を捜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに
言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山
にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劔戟を執つて、多人數押
し寄せて參られ、三門を開けといはれた。さては國に大亂
でも起こつたか、公の叛逆人でも出來たかと思つて、三門を
開けさせた。それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。
當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸
翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かれると國
守は檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へ
たら、都からどのやうな御沙汰があらうやも知れぬ。そこ
を好う思つて見て、早う引き取られたが好からう。悪い事

睨

齒咬

手のものどもは
唯だ風に木葉の
ざわつくやうに
囁きかはしてゐ
る。

は云はぬ。お身達のためぢや。」かういつて律師はしづか
に戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。併し戸を打破つ
て踏み込むだけの勇氣もなかつた。手のものどもは唯だ
風に木葉のざわつくやうに囁きかはしてゐる。

此の時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたといふの
は、十二三の小わつばぢやらう。それならわしが知つてゐ
る。」三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まが
ふやうな親爺で、此の寺の鐘樓守である。親爺は詞を續い
ていつた。「そのわつばはな、わしが午頃鐘樓から見てる
と、築泥の外を通つて南へ急いだ。かよわいかはりには身

鐘樓守

三郎は取つて返した。

鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。

田邊
今の丹後國加佐郡舞鶴町

が軽い。もう大分の道を行つたぢやろ。
「それぢや。半日に童の行く道は知れたものぢや。続け。」
といつて、三郎は取つて返した。
松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落着いて寝ようとした鴉が二三羽、また驚いて飛び立つた。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた討手が田邊まで往つて引返した事を聞いて來た。

剃

頭を剃りこくつて三衣を着た厨子王が附いて行く。

朱雀野
京都市中京區
昔の朱雀大路

踵を旋した。

清水寺
京都の東山にある寺
本尊は觀音

中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の受糧器を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。跡からは頭を剃りこくつて三衣を着た厨子王が附いて行く。

二人は眞晝に街道を歩いて、夜は處々の寺に泊つた。山城の朱雀野に來て、律師は權現堂で休んで、厨子王に別れた。「守本尊を大切にしていって、往け、父母の消息はきつと知れる。」と言ひ聞かせて、律師は踵を旋した。亡くなつた姉と同じ事を言ふ坊様だと、厨子王は思つた。

都に上つた厨子王は、僧形になつてゐるので、東山の清水寺に泊つた。

直衣 烏帽子 指貫

直衣に烏帽子を着て指貫を穿いた老人

参籠する。

身の上を明かす。

籠堂こもりどうに寝て、あくる朝目が覺めると、直衣に烏帽子を着て指貫を穿いた老人が、枕元に立つてゐて云つた。「お前は誰れの子ぢや。何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞ己おれに見せてくれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆうべこゝに参籠した。すると夢にお告げがあつた。左の格子に寝てゐる童わらわが、好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませいといふ事ぢや。けさ左の格子に来て見れば、お前がある。どうぞ己に身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。己は關白師實ぢや。」

厨子王は云つた。「わたくしは陸奥掾正氏といふものの子でございます。父は十二年前筑紫の安樂寺へ往つたき

り、歸らぬさうでございます。母は其の年に生れたわたくしと三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡しのぶごほりに住むことになりました。そのうちわたくしがだいぶ大きくなつたので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐ろしい人買に取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしとは丹後の由良へ賣られました。姉は由良でなくなり、ました。わたくしの持つてゐる守本尊は此の地藏様でございます。」かう云つて守本尊を出して見せた。

師實は佛像を手に取つて、先づ顔に當てるやうにして禮をした。それから面背おもむきを打返しく、丁寧に見て云つた。

「これはかねて聞き及んだ、尊い放光地藏菩薩の金像こんざうぢや。

師實

關白太政大臣
藤原師實
後三條、堀河兩
天皇に仕へた
康和三年薨
年六十一

遠格 仙洞

遠格に連坐す。

左遷

還俗

受領の御沙汰。

冠を加へた。

百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にしておいでなされ
た。これをもち傳へてをるからは、お前の家柄に紛れはな
い。仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初めに、國守の
遠格に連坐して、筑紫へ左遷せられた平正氏が嫡子に相違
あるまい。若し還俗の望みがあるなら、追つては受領の御
沙汰もあらう。先づ當分は己の家の客にする。己と一し
よに館へ來い。」

師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に
正氏が謫所へ赦免状を持たせて、安否を問ひに使を遣つた。
しかし此の使が往つた時、正氏はもう死んでゐた。元服し

て正道と名告つてゐる厨子王は、身の窶れる程歎いた。

其の年の秋の除目に、正道は丹後の國守にせられた。

國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁じた。そこ
で山椒大夫も悉く奴婢を解放して、給料を拂ふことにした。
大夫の家では一時それを大きい損失のやうに思つたが、此
の時から農作も工匠の業も前に増して盛んになつて、一族
はいよく富み榮えた。國守の恩人曇猛律師は僧都にせ
られ、安壽が亡き迹は懇ろに弔はれ、又その入水した沼の畔
には尼寺が立つことになつた。
正道は任國のためにこれだけの事をこて置いて、特に假
寧を申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。

安壽が亡き迹は懇ろに弔はれ、又その入水した沼の畔には尼寺が立つことになつた。

假寧

雜太
佐渡國雜太郡
今は佐渡郡雜太
郷。佐渡島の
中部國府川のほと
りであらう。

佐渡の國府は雜太と云ふ所にある。正道はそこへ往つて、役人の手で國中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。

思案に暮れながら市中を歩いた。

或日正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立ち並んだ所を離れて、畑中の道に掛かつた。空は好く晴れて、日があか／＼と照つてゐる。正道は心の中に、「どうしてお母様の行方が知れないのだらう、若し役人なんぞに調べさせて、自分が捜し歩かぬのを、神佛が憎んで逢はせて下さらないのではあるまいか。」などと思ひながら歩いてゐる。ふと見れば、だいぶ大きい百姓家がある。家の南側の疎な生垣の内が、土を敲き固め

何やら歌のやうな調子でつぶやく。

た廣場になつてゐて、其の上一面に蓆が敷いてある。蓆には刈り取つた粟の穂が干してある。その眞中に、襪褌を着た女がすわつて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つてゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。

癩病のやうに身内が震つて、目には涙が湧いて來た。

正道はなぜか知らず、此の女に心が牽かれて、立止まつて覗いた。女の亂れた髪は塵に塗れてゐる。顔を見れば盲である。正道はひどくあはれに思つた。そのうち女のつぶやいてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞き分けられて來た。それと同時に正道は癩病のやうに身内が震つて、目には涙が湧いて來た。女はかういふ詞を繰返してつぶやいてゐたのである。

安壽戀しや、ほうやれほ。

厨子王戀しや、ほうやれほ。

鳥も生あるものなれば、

疾うく逃げよ、逐はずとも。

臟腑が煮え返るやうになつた。齒を食ひしばつて怵へた。

正道はうつとりとなつて、此の詞に聞き惚れた。その内臟腑が煮え返る様になつて、獸めいた叫びが口から出ようとするのを、齒を食ひしばつて怵へた。忽ち正道は縛られた繩が解けた様に垣の内へ駆け込んだ。そして足には粟の穂を踏み散らしつゝ、女の前に俯伏した。右の手に守本尊を捧げ持つて、俯伏した時に、それを額に押當てゝゐた。女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知つ

干した貝が水にほとびるやうに兩方の目に潤ひが出た。

た。そしていつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目でぢつと前を見た。其の時干した貝が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出た。女は目が開いた。

「厨子王」といふ叫びが、女の口から出た。二人はぴつたり抱き合つた。

〔山椒大夫〕

八 読み書きの第一義

文章の味はひやうは幾通りもあるであらう。言葉の意味の詮索や、文法上の研究なども、一つの味はひ方である。言葉の使ひ方、擇み方、あやなし方、或は文句の續け方、切り方、

我々の生活の中に溶かして讀むこと

古人の生活や、他人の生活を我が生活の中に溶かして讀むこと

轉じ方は、（さしつかへなく）まぜ方、或は段落の分け方、或は書き始め書きをさめの工夫などといふ事を考へるのも、一つの味はひ方である。身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平らかにする上の教訓を之れに求めるのも、一つの味はひ方である。物識りにならうとしての貪讀も、一つの味はひ方であるかも知れぬ。是等のやり方には、皆それらの味はひがあるであらうが、吾々が第一に興味を感じて居るのは、（昔の事だ）古人の生活や、他人の生活を、我が生活の中に溶かして讀むことである。昔の事だ、他人の事だと、棚に上げずして、餘處ならず感じつつ、身に沁みて讀むことである。一體、言語、人種、階級等の相違は、とかく人を分け隔てする傾きのあるものである。平

過ぎ去つた生活や、微の生えた言葉。

書物や文章の上では、誰れしも平等一如に、他人の思想を味はひ得べき筈のものである。

安朝や鎌倉時代の書物を見ると、過ぎ去つた生活や、微の生えた言葉は、われわれに用が無いなどといふことになる。貴族の書いたものをば、殿様達の夢妄想と冷かすやうになる。支那人、西洋人の書いたものをば、唐人や、異教徒の書いたものは、吾々に縁が遠いなどと考へるやうになる。本來、かやうな隔てのやかましく存在して居るのは、むしろ現在の社會で、書物や文章の上では、誰れでも平等一如に、他人の思想を味はひ得べき筈のものであるが、それでも、時が隔たり、所が隔たり、國や、人種や、階級や、宗教が違ふと、つい其の文章に隔ての厚皮といふものが出て來て、著者と讀者との間を疎くし、讀者をして書物に書いた事を餘處事と思はせ、從

本來人間の性情は古今東西同様のものである。

つて文字の意味が解ればそれで澤山と思はせるやうになる嫌ひがある。

本來人間の性情は古今東西皆同様ののもので、その性質が違つた境遇に居り、違つた事物にぶつかつたために、違つて現はれたといふに過ぎぬ。此の違つた所を通して同一なる深い所を見、言葉や境遇といふ隔ての厚皮を剥いて、彼れの血を我が血に注ぎ入らしめ、隔ての溝の泥や埃を浚つて、彼れが心の泉と我が心の泉とを疏通せしめるのが、讀書道第一の要旨である。書物を解釋、評論する者の第一の務めは、此の隔ての厚皮を剥ぎ、溝泥を浚つて著者の血涙と讀者の血涙とを疏通せしめる所にあるであらう。言葉といふ

彼れの血を我が血に注ぎ入らしめ、彼れの心の泉と我が心の泉とを通ぜしめるのが、讀書道第一の要旨である。

赤裸々にした著者の生活を讀者の生活に接合させる。

著者の生活の脈を打つて居る所に觸れ、心に沁み込ませ、心に沁み込ませ、本當に讀んだといふものである。

邪魔物を去り、國土階級人種あらゆる障碍物を取り除けて、赤裸々にした著者の生活を讀者の生活に接合させる所にあるであらう。偉大なる雄辯を聽く時に、吾々は、室を忘れ、演壇を忘れ、辯者の容貌風采を忘れ、唯だ言葉といふ微妙な電線を傳はつて、向うの心と我が心とが合するやうに感ずるではないか。古人の書物を讀んでも、文字を忘れて、著者の生活の脈を打つて居る所に觸れ、心に沁み込ませ、心に沁み込ませ、本當に讀んだといふものではないか。諺に「目が物をいふ」といふが、書物を讀んで、著者の目が物を言ふのを見るやうでなければウソである。世に肉親の者の血は互に融け合ふと云ふが、昔の人の血も、外國の

隔てを取り去つて、古人に對して肉親の親しさを感ずるのが、讀書の第一の味はひであらう。

人の血も、隔ての障礙さへ取り除けば、我々の血と融け合ふべきもので、その隔てを取り去つて、古人に對し肉親の親しさを感ずるのが、讀書の第一の味はひであらう。此の隔ての厚皮となり、埃や泥となる難文句の解釋などをしたただけで十分と思ふ讀書は、到底眞の讀書といはるべきものではない。

我が感じたと同じやうに相手に感じさせる事である。

書く方から見ても同じ事で、吾々の第一に心掛くべき事は、我が考を明らかに相手に傳へること、我が心持、感じ、味はひを其のまゝに現はして、我が感じたと同じやうに相手に感じさせることである。むづかしい言葉を使つて知識を誇つてやらう、巧い言ひ廻はしをして人を驚かしてやらう、

つまらない感情を深げに、床しげに、有難げに繕つてやらう、などいふのは、飛んでもない考へ違ひである。

讀む方から云へば、表面の障礙物を破り、底の底に入り込んで、著者の眞生活に觸れるやうにしなければならぬ。

テレンス
ローマの喜劇作家、詩人

人間に關する事は、すべて我れに取つて餘處事とは思はれぬ。

文章は、書く方から云へば、感じや味はひを、成るべく解り易く、其のまゝに書いて、讀者が苦勞なしに、我が眞の心持、眞の生活に觸れ得るやうにしなければならぬ。讀む方から云へば、表面の障礙物を破り、底の底に入り込んで、著者の眞生活に觸れるやうにしなければならぬ。昔プロトマのテレンスといふ詩人は、人間に關する事は、すべて我れに取つて餘處事とは思はれぬ。といつた。文章を讀む者、書く者の第一の目のつけどころは、他人の文章を餘處事と思はぬやうに、我が文章を餘處事と思はせぬやうにといふ事でなければ

ばならぬ。

〔作文三十三講〕

九 牛

老農友稗田杉屏氏の話である。

「日本の古言には、簡単な裡うちに、實に奥深い眞理を含んだのがあるものです。ね。いつぞや——もう二十年にもなりませうか——海上胤平うみのかみ ねひらといふ歌人が、小出繁こいで しばといふ人の歌を評した中に、小出氏の歌に「牛牽うしひきく云々」とあつたのを咎めて、外國は知らず我が國では、昔から牛には「追おふ」と言ひ來つたものであるのに、「牛を牽ひく」といふのは落着かない詞遣だと云つ

海上胤平

明治の歌人

通稱六郎

千葉縣の人

大正六年歿

年八十八

小出繁

歌人

御歌所寄人

舊石見濱田藩士
明治四十一年歿
年七十八

牛牽く云々

賤の男が牛ひき
かへるうしろ影
見る／＼消えて
野は暮れにけり

乞食こじき

東京市豊島區巢

鴨町大塚驛のす

ぐ北

意氣地のない弱
蟲だ。

たのがありました。當時私はそれを見て、歌人なんて暇ひまつぶしに下らん事を云つて楽しんで居るものだと思つて、馬鹿にして居りましたが、其の後十數年経つて、はッと思つたことがありますよ。

それは斯ういふわけです。

或日牛を一匹、板橋まで送つてやる用事があつて、一人ひとの男にあづけて出してやりましたが、程なく走つて來て、「乞食橋の向うまで行くと、牛が坐り込んで、どうしても動かなくなりました。」といふのです。「意氣地のない弱蟲だ。それぢや、お前が行つて手傳つてやれ。」と云つて、小力のある他の男を附けてやりましたが、しばらくすると、それが又歸つて來

馬鹿な奴だ。
情ない者どもだ
な。

て「二人でも、どうしても立ちません。」と申しました。「馬鹿な奴だ。二人掛りで牛一匹動かせない奴があるか。では五平、お前が行つてやれ。」と申しますと、五平は「情ない者どもだな。それぢや己れが一つ立たしてやらうか。」などと云つて、威勢よく出かけて行きました。が、しばらくすると、それもまた歸つて来て、

「旦那、どうしても動きませんよ。今日はどうかしたんですな。打つても、叩いても、引張つても、だまして、一寸も利きませんや。」

と申しました。私は「をかしい事だ、しかし己れが行けば、どうにかなるだらう。」と、怪しみながら、動物に對する飼主の威

光と男共には多少優つた一日の長とを頼みにして、急いで

六戸邸
舊六戸子爵邸
東京傷兵院
豊島區巢鴨町

鞭うつたり、あ
やしたり。

困りぬいて呆然
としてゐる。



牛を追ふ圖 (河合玉堂筆)

行つて見ますと、成程、牛の奴が六戸邸後の傷兵院の裏門の前に、大磐石と腰を据ゑて居り、まはりには眞黒に人だかりがして居ります。それから私は三人の男に手傳はして鞭うつたり、あやしたり、いろくゝと工夫をして見ましたが、どうしても、一寸も動かす事が出来ません。

困りぬいて呆然として居りますと、人だかりの中に、半纏

半纏を着て股引
をはいた牛方ら
しい六十恰好の
老爺さん。

を着て股引をはいた牛方らしい六十恰好の老爺さんが居
りましたが、

「旦那、それぢや動きますまいよ。私が一つやつて見ませ
うか。」

と云つて呉れました。「それは有難い、是非に。」と云つて、ねん
ごろに頼みますと、老爺さんは私の手から鼻綱を取つて、靜
かに牛の右側に立ちましたが、右の手に持った綱を伸ばし
て、牛の腰のあたりを軽く打ちながら、しッ！しッ！と申し
ますと、大磐石の牛が、忽ち一身振ひして、ムツクリと起き上
がりました。それから老爺さんは後ろの方に立つて、尻を
打ちつゝ、二三度圓く引き廻はしましたが、やがて三四十間

大磐石の牛が、
忽ち一身振ひし
て、ムツクリと
起き上がった。

追つて行つて、

「さア、かうして後ろから追つていらつしやい。もう大丈
夫です。」

と云つて、綱を渡して呉れました。

私は厚く禮を述べて別かれましたが、此の時電光のやう
に私の頭に浮かんで來たのは、例の海上氏の云はれた、牛に
は「追ふ」といふ我が古言でありました。私は一向古學に不
案内ですが、古い大和言葉の中には、いくらも斯ういふ風に、
祖先が幾百年の經驗を結晶させて、三四字の中に不動の眞
理を疊み込んだのがあることとせう。言葉の味はひなん
といふものは、實にえらいものですね。」

電光のやうに頭
に浮かんで來
た。

古い大和言葉の
中には、いくら
も斯ういふ風
に祖先が幾百年
の經驗を結晶さ
せて、三四字の
中に不動の眞理
を疊み込んだの
があることとせ
う。

詩文を鑑録

賈島

唐の詩人

應舉

徳川時代の畫家
姓は圓山

通稱主水

寛政七年歿

年六十三

フローベル

(1821-1880)

フランスの小説家

藤井紫影

國文學者

文學博士

名は乙男

兵庫の人

明治元年生

私は此の老農友の話をば、賈島が「推敲」の話よりも、應舉が「猪のしゝ」の話よりも、觀世太夫が「木賊刈」の話よりも、フローベルが一語説よりも、更に面白く、更に意味が深いと思ひ、黙止すにもだされずして備忘することにした。
〔野草集〕

一〇 俗字と當字

藤井紫影

一體當字とは何であるか。嚴格にいへば當字と正字との區別は甚だ立ちにくい。萬葉集の例でいへば、天地、日月をアメツチ、ヒツキとよむが正字で、垣津旗をカキツ、バタ、管士をツ、ジとよむ類は當字であらうが、泊湍をハツセ、丸雪

意字と音字

どこまで行つても此の災厄を脱することが出来ない。

大海爾鷗毛不在爾
海原絶塔浪爾立有
白雲
わたつみにしまも
あらぬにあまのは
らたゆたふなみに
たてるしらくも
右一首伊勢從駕
作

をアラレといふのは、當字とも見られ、さうでないとも考へられる。この種の區別が甚だむつかしい。意字(漢字)と音字(假名)とを併用する日本文は、どこ迄行つても此の災厄を脱することができないのである。いかに文字に潔癖な文士でも、當字なしには二行と小説も手紙も書けまい。多年の習慣で當字を正字と心得て使用して居る人も多い。兎角、馬鹿、泥棒、面倒、武骨などは最も廣く行はれて居るもので、こんな當字はいけない

大海余鷗毛不在爾海原絶塔浪爾立有
白雲
わたくしにしまもあらぬにあまのはらたゆたふなみにたてるしらくも
右一首伊勢從駕作

元暦本校萬葉集

萬葉流

無暗矢鱈

出鱈目

滅茶苦茶

と言つたら、誰れしも忽ち困るであらう。さりとして、どうせ漢字は色取りにまぜるだけの事だ、萬葉流だと思へばよからうなどと高を括つて、無暗矢鱈に出鱈目な文字を滅茶苦茶に使はれても困る。こゝの兼合（そまひ）ひが至極難儀である。

變挺

馬聲、蜂音、石花
蜘蛛、荒蚊

假名の發明ができた後も、とかく漢字崇拜の風がつきまとひ、すべての俗語に漢字を當てねば満足しないで、通俗字書たる節用集の類に、變挺な漢字をあてゝそれが今日まで及んだ。畢竟語源の明らかでない詞に、よい加減な素人考で漢字をあてるから起こつたので、萬葉の馬聲（ウマノネ）、蜂音（ハチノネ）、石花（イシハナ）、蜘蛛（クモ）、荒蚊（アラガモ）、アルカと洒落書（シヤクシャク）きした當人が、おれの智慧を見ろとひそかに誇つたであらう如く、フザケを巫山戯

讀者の目に印象
づける。

矢張

耳にもかけぬ。

ガタピシを我他彼至と當て初めた人も、多分得意であつたらうと想はれる。こんな惡洒落はよして、すべて假名がきにしたら好からうといふ人もあるが、それも場合によつて一概にさうもなりかねる。餘り假名が長く續くとか、強く讀者の目に印象づけようとする時は、どうも漢字でなくては具合がわるい。當字と知つてゐながら、矢張使はねばすまぬ。馬鹿は梵語から出た語でも、莫迦（マカ）と書くより馬鹿の方がウツリがよい。ブコツはコチナシ（コチナシ）（無骨）から出たにせよ、それでは海鼠の様で武骨らしく見えない。語原學者がいかにも怒號しても、一般民衆は耳にもかけないであらう。俗間にはフォルクス、エチモロヂーがあつて、メンクラブ

耳遠い感

神経を尖らせる

は目昏ムめくらむの轉訛てんしだといふよりも、擊劍きけんでなぐりつけられて面喰めんくつたのだと説く方が却て人氣があつて信用され易い。メンドウは目遠めとほいで見るを厭いとふ意より起こつた詞で、現に醜みにくいことをメンドイといふ地方もある。しかし是れは一般民衆には耳遠い感を起こさすことであらう。

何れにせよ普通使用する漢字の使ひ方といふものは、餘り正確なものではないのだから、餘り神経を尖らせぬがよい。さうかと思ふと、又一方では、近頃日の字に陽を使ふことが文士連の間に流行して、わざ／＼振假名つきで短歌などに盛んに用ゐられる。日の方が象形的でもあり、字畫も少なくて便利なのに、妙な事がはやるものだ。思ふに日は

一日二日といふに紛れ易いと心配から來たのであらうが、それなら陽も太陽と限つた事ではない、廣く陰陽の意味にも使はれるではないか。また平常の意味なる不斷を普段と書く小説家の多いのも合點のいかぬ事である。

『文藝春秋』

一一 富士の大觀 その一

大町 桂月

大町桂月

明治大正の文章家
名は芳衛 土佐の人
大正十四年歿
年五十七

高さを云はゞ、亞細亞のヒマラヤを始めとして、歐のアルプス、米のロッキーマウンテン等、我が富士山を越ゆるもの少なからず、されど正しき圓錐形を成し、偉大にして秀麗を極むること、世界富士に比すべきものなし。妙高、戸隠、立科、八ヶ嶽、箱根、

日本山岳の盟主
山また山の奥

其の實を失ふ。

天城など、所謂富士火山帯の盟主たると共に、日本山岳の盟主にして、ほゞ日本の中央部に位するが、山また山の奥に隠れず、東海に接して、周圍に裾野を控へ、四面其の形を改めず、近く之れを一周するを得べく、展望二十一國の多きに達す。「十三州一目」とは、在來言ひふるされたる所なるが、これ其の實を失へり。十三州とは相模、武藏、安房、上總、下總、上野、下野、常陸の關八州の外に伊豆、駿河、甲斐、遠江、信濃を加へたるものなるべきがなほ越後の妙高山、越中の立山、美濃の恵那山、伊勢の朝熊山、尾張の小富士、三河の石卷山、信濃より飛驒に跨れる御嶽、常陸より磐城に跨れる八溝山より富士山を望むを得べければ、事實は富士より二十一國を見下し、二十一



(兼觀大山横)

權山と山士富

雪を被りて白玲瓏たり。

山部赤人
奈良朝の歌人

宗鑑
連歌師

山崎宗鑑
天文二十三年歿
年八十九

ひのものと富士に
まづさす初日かな
桂月

國より富士山を仰ぐなり。

富士山は夏を除きては、雪を被りて白玲瓏たり。夏とても山上には雪の消えざる處あり。雪は一層富士を美にし、兼ねて神聖にす。山部赤人の「田子の浦ゆ打出てて見れば眞白にぞ富士の高根に雪は降りける」は、この美觀を捉へたるなり。宗鑑の「元朝の見るものにせむ富士の山」も同じく

日本の富士を仰ぐなり
宗鑑の「元朝の見るものにせむ富士の山」も同じく

大町桂月筆蹟

この美觀を捉へたるなり。何處よ

り見たる富士最も美なるかとは、よく人の問ふ所なるが、こは容易に決し難き問題なり。東京に富士見町と稱する町、

武藏野に冠たり。

雄にして峭、温にして秀。

繪空事

魏町區にもあり、麻布區にもあり。何れにても富士よく見ゆるが、向島より隅田川を隔て、富士を望む景色、東京にては最も優れたるを覺ゆ。少し東京を離れては、荒幡の新富士より富士を望むの景、武藏野に冠たり。江の島より海を隔て、大山を右にし、箱根を左にして、富士を望むの景も好し。箱根の蘆の湖や信濃の諏訪湖の逆富士も、一風變はりて面白し。四面其の形を改めざるが、頂上の峰の具合や傾斜の具合は、多少の相異あり。近く甲州方面より仰げば、傾斜急にして、雄にして峭なり。近く駿州方面より仰げば、傾斜稍緩にして、温にして秀なり。よく繪に見る三峰分立の頂は、所謂繪空事に非ず。西麓なる北山の本門寺あたりよ

生前埋骨の地を相す。

脚下に俯して、富士眞に偉大の觀を呈す。

り之れを見るを得べし。直ちに富士に接する濱と云へば、たゞ田子の浦あるのみなり。青松白砂數里の長きに達す。龍華寺の富士も有名なり。高山樗牛生前自ら埋骨の地をこゝに相せり。三保の松原や、伊豆の西海岸や、稍離れて三浦半島の西海岸や、房州の西海岸や、いづれも海を隔て、富士を望む。海を隔つるならば、ずつと離れて、伊豆の大島、殊に三原山の上より見れば、群峰脚下に俯して、富士眞に偉大の觀を呈す。

御坂峠、西行坂、花水坂を富士の三景といふは、甲州にて富士を望むに優れたる處なり。御坂峠は河口湖を下にして富士を望む。西行坂は富士川を下にして富士を望む。花

水坂は富士川の上流なる釜無川を下にして富士を望む。



甲州御坂峠の富士

中央線の富士見平の景は、
ほゞ花水坂と同じ。太平
洋數十里の外にあつて、幾
んど富士の全幅を望む。
外國より歸る人々未だ横
濱に入港せざるに、先づ富
士を仰ぎて故國に還りた
る心地すべし。すべて平
地にて見るよりも、山の上
にて見る方が、富士の偉大

富士の全幅を望む。

十二ヶ嶽
甲斐國

山は云々
實語教の句
山に云々
頼山陽題耶馬溪
圖卷記の句

香川景樹
徳川時代の歌人
天保十四年歿
年七十六

を感じ。箱根の乙女峠の富士は世に有名なり。余が富士を見て最も偉大の感に打たれたるは、遠くにては大島の三原山より見たる時なり。近くにては十二ヶ嶽より西、河口二湖を隔て、見たる時なり。

「山は必ずしも高きを尙トばず、樹あるを尙トぶ」といひ、「山にして水を得ずんば生動せず」といへるが、これ普通の山のことなり。一萬二千五百尺の富士山となれば、樹に超脱トし、水にも超脱す。高い哉富士の山。全山を十合に分かつ。麓の一合が既に附近の群峰の上にある。香川景樹の「群山の高根高根をつたひ來て富士の麓にかゝる白雲は、げに實況なり。脚底に雲を見、雷を聞きつゝ、攀ぢ行けば、下界を離れて、

神聖の感に打たる。
氣澄みて月近し。手を伸ばさば届かんとばかり思はる。

天に登る心地す。頂上よりは近く伊豆、相模、駿河、甲斐、信濃などの山々を見下し、駿河灣を見下し、相模灘を見下し、遠州灘を見下し、上總、下總の彼方の太平洋を見下す。太陽の直ちに海より出づるを見る。殊に下界を蔽ひつくしたる雲の海の果より、太陽の昇るを見れば、何人か神聖の感に打たれざらん。氣澄みて月近し。手を伸ばさば届かんとばかり思はる。

一二 富士の大観 その二

大町 桂月

普通一般に日本國民が神聖の感に打たるは、二重橋外

藤田東湖
水戸の志士
名は彪
安政二年歿
年五十
神州にふさはしき山。

北 敷
内 へは
はに文
はに文
はに文

より皇居を拜するの時なるべし。若しくは水清き五十鈴川の彼方、鬱蒼たる神路山の前に、大神宮を拜するの時なるべし。之れを自然界に求むれば、白玲瓏の富士を仰ぐの時なるべし。萬世一系の天皇は人にして神におはす。神の知らず日本は神州なり。藤田東湖は神州の正氣を歌ひて「秀爲富士嶽」といへり。日本に山は多けれども、神州にふさはしき山は、富士の外に求むべからず。東海に屹立して、白玲瓏の姿は、げに神州の山なり、神の山なり。本居宣長の「敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花を一轉して、敷島の大和心を人間はば朝日にはゆる富士の白雪」といひても、日本人に不同意は無かるべし。富士は秀麗なり、正大なり。

世界觀光の客なほ富士に傾倒す。神州の國民は何人も富士と默契あるべき筈なり。

太田道灌
足利末の武將
文明十八年歿
年五十五

煤煙立ち昇る煙突の間にも、富士だに見ゆれば、工業地も詩の國となる。

清淨なり。凜として氣高き趣あると共に、温にして親しむべき趣もありて、神州の氣象を代表す。大和魂地に凝つて富士山となれるか、富士山人に凝つて大和魂となれるか。世界觀光の客なほ富士に傾倒す、神州の國民は何人も富士と默契あるべき筈なり。

野を行きても、山に入りても、海に浮かびても、富士を見れば何となく床しくして、一種の神に接する心地す。太田道灌は「わが庵は松原つゞき海近く富士の高根を軒端にぞ見ると歌ひたるが、何はさて置き富士を窓に入るゝ家こそ、日本人の理想の住居なれ。煤煙立ち昇る煙突の間にも、富士だに見ゆれば、工業地も詩の國となる。電車自動車旁午

大空に自然の繪畫を展べ、自然の詩歌を綴る。

して電線空に蜘蛛の巢を張れる市塵の中にも、富士だに見ゆれば都會も繪の國となる。鳥居の上に富士見えて祠はいよく、靈に、尾花の末に富士見えて野はますく、なつかし。富士の高趣は、古來描いて描く能はず、歌うて歌ふ能はず、富士たゞ黙々として、大空に自然の繪を展べ、自然の詩歌を綴る。

世には眺めて好き山あり、登りて好き山あり。富士や眺めても好く、登りても好し。山を見下し、野を見下し、近く五湖を見下し、遠く太平洋を見下す。雲と路を争ひて登り、渴して千秋の雪を掬す。頭上に明月を戴きながら、脚底に雷鳴を聞く。飛ぶ鳥はたゞ背を見る。動物も追隨する能は

天風蓬々として
何處ともなく仙
樂を奏す。

ワ字
スガタ

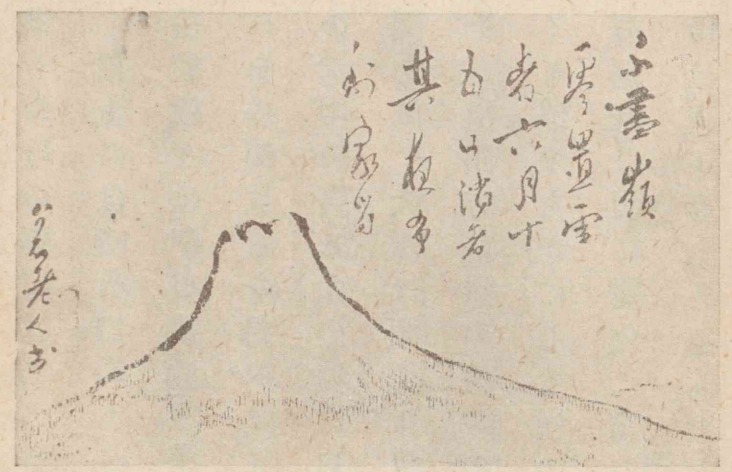
千草八千草の秋
の錦天に連る。

田子の浦を控へ
五湖を湛ふ。

ず。天風蓬々として何處ともなく仙樂を奏す。
富士の周圍は開墾せられ、植林せられ、村里立ち續きて、頼
朝が卷狩せし時の佛は見るを得ざれども、人穴より本栖に
至る間は高原の趣を存し、吉田より馬返に至る鈴ヶ原も裾
野の趣を存して、千草八千草の秋の錦天に連る。西北麓の
大室山を中心にして本栖、精進、西の三湖の間、二三里四方は
青木ヶ原、一に樹海といひて、松楓雜木など生ひ茂りて、仰い
て天を見ず、山麓に一種特別の風致を見る。
富士は駿河甲斐二國に跨りて相模には跨らず。駿河方
面には青松白砂の田子の浦を控へ、甲斐方面には山中、河口、
西、精進、本栖の五湖を湛ふ。一つくにては富士に對して

他に見られざる
景致。

富士の嶺に降り置
ける雪は水無月の
望に消ぬればその
夜ふりける
介石老人書



萬葉不盡の歌 (野呂介石筆)

あと小なるが、五湖を合して始
めて他に見られざる景致を顯
はし、富士に配するに足る。
白糸瀧、佐野瀧、鐘山瀧など瀑
布も少なからず。就中白糸瀧
は高さ數丈に過ぎざれども、幅
は百八間に達して、天下に其の
比を見ず。この附近は、建久年
間、源頼朝が卷狩を爲したる處、
曾我兄弟が父の仇を討ちたる
處、兄弟を祀れる曾我神社あり。工藤祐經の墓もあり。偉

大なる狩宿の駒止櫻唯一本にて天下の春を領し、野花咲き満ちて、秋の裾野は蟲の音の天地となる。

頂上には噴火口あり。その周圍に劔ヶ峰、白山岳、久須志岳、成就ヶ岳、伊豆岳、駒ヶ岳、淺間岳、三島岳の八峯聳峙す。之れを一周するを得べく、また中腹を一周するを得べし。その途中の寶永山の噴火口は、牡丹畑とて牡丹に似たる火山彈あり。大澤は頂上より裂けて麓に達す。天狗の庭は凡そ一里四方自然の盆栽の陳列場となる。小御岳は珍らしくも地平らかにして樹の林あり。中道にも勝致多く、四周の裾野は更に變化に富む。かく中腹を廻り麓を廻り得る山は、天下廣しと雖もたゞ富士山あるのみなり。〔富士行〕

自然の盆栽の陳列場

一三 美しい日本

山村 暮鳥

山村暮鳥
本名土田八九十
詩人
大正十三年歿
年四十一

日本。うつくしい國だ。
葦の葉ツばの朝露がぼたりと
おちてこぼれてひとしづく、
それがこの國となつたのだとでも
言ひたいやうな日本。
大海のうへに浮いてゐる
かはいらしい日本。
うつくしい日本。

小さな國だ。

小さいけれど、

その強さは鋼鐵はがねのやうな精神である。

おゝ日本。

ぴち／＼してゐる魚のやうな國。

勇敢な日本、

古い日本。

その霧深い中にとぢこもつて、

山鳥の尾のなが／＼しい夢を見てゐたのも、

今はもうむかしのことだ。

目をあけて、

そこにどんな世界をお前は見たか。

日本、日本。

お前のことをおもふと、

この胸が一ぱいになる。

お前は希望にかゞやいてゐる。

お前は力にみち／＼してゐる。

そして眞劍だ。

だが日本よ、

お前の道はこれまでのやうに

もうあんな平坦なものではあるまい。



お前はよるひる絶えず
お前のまはりに打ち寄せてゐる
その波の音をなんときいてゐるか。
寂しくないか、
おゝ孤獨な
遠い一つ星のやうな日本。
からりとはれた黎明の天空のやうな國。
ときくは通雲の
さつとかゝるくらゐのことはあつても、
おまへはたゞの一度でも、
その顔面に泥をぬられたことがないんだ。

そんな美しい國なんだ。

日本。

幸福な日本。

強い日本。

わたしはこゝで生まれたんだ。

またこゝで最後の息をひきとつて、

遠祖らと一緒にゐるんだ。

墳墓の地だ。

静かな國日本、

小さい國日本、



つよくあれ、
すこやかであれ、
奢るな、
日本よ眞實であれ、
ばかにされるな。

一四 福澤翁の生家を訪ふ

房州に海水浴中の子供へ

相變はらず暑いが、元氣に泳いで居るか。

昨夜は中津に泊つた。今日はこれから耶馬溪に向ふのだが、發車まで時間があるので、其の間に福澤先生の舊宅を

中津
大分縣中津市

見ることにした。

中津は福澤先生で光つて居る所だ。多くの市や町や村が、有名な政治家や軍人や實業家で光つて居るのは、餘程違つた深い意味で光つて居る所だ。さればこそ先生が二十一歳で長崎へ行かれる時に、

「こんな所に誰れが居るものか、一度出たらば鐵砲玉で、再び歸つて來はしないぞと、後ろを向いて、唾をして、颯々と足早に駈け出した。」

といふ、これほど迄に呪はれた其の中津が、今はすつかり先生の前に叩頭をして、停車場前なる名所案内の立榜には「福澤諭吉先生舊宅、北へ九丁」と筆太に記して、特に先生だけに

福澤先生
明治の先覺者
教育家
慶應義塾の創立者
名は諭吉
中津の人
明治三十四年歿
年六十八
中津は福澤先生
で光つて居る所
だ。

これほど迄に呪はれた其の中津が、今はすつかり先生の前に叩頭をしてゐる。

關する五枚一組の繪はがきを賣り出だし、其の舊宅には花崗石の立派な標柱を二本まで立て、留守居に守らせ、そして町の目貫の場所には、先生の修身要領の標語たる「獨立自尊」の四字を刻んだ立派な高いオベリスク型の記念標まで立て、居るではないか。

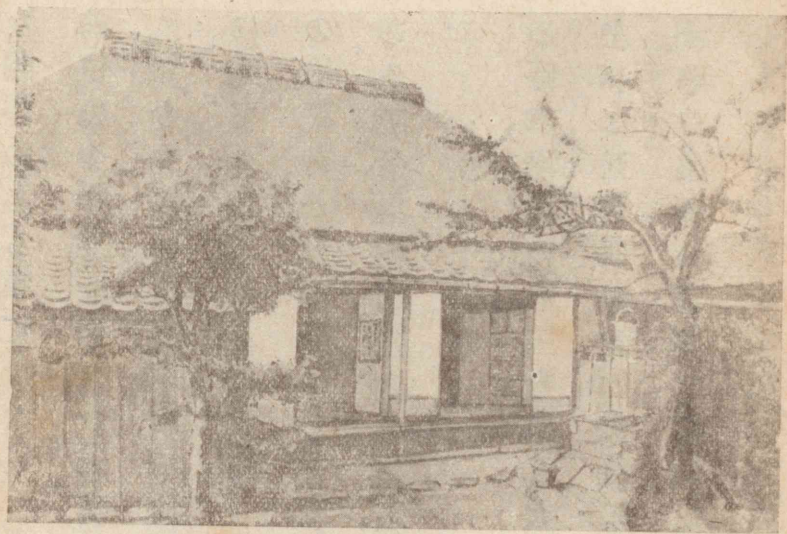
とにかく福澤先生は明治の新文明の種を蒔いて、それを育て上げてくれた大きい人だ。其の大きい人が、父を喪つた後の貧困や世間の迫害やと闘つて、三歳から二十一歳までの子供時代を送られた家は、吾々に多くの教訓を與へるであらう。山水風景の消息などは、それが瀬戸内海のであらうと、耶馬溪のであらうと、今のお前に取つてさまで重要

福澤先生は明治の新文明の種を蒔いて、それを育て上げてくれた大きい人だ。

な關係のある事ではない。けれども福澤先生が今日のお前位の少年期を送られた舊宅の様子だけは、是非ともお前に知らせたいと思ふので、此の一事の通信だけは、特にお前に宛て、書くことにする。此の手紙と、一緒に添へた五枚の繪葉書とを背景にして、成るべく近い機會に、奥の本箱にある『福翁自傳』の最初の百頁を讀んでくれ。

停車場前の宿屋を出て、大體北の方角へ志しながら、左へ左へと五六度曲ると、最後に南北と割れた一間幅位の狭い小路に出る。左側に細い川が流れてゐる、其の狭い小路を一丁ばかり入つて行くと、左に曲る小路があつて、其の入口

此の手紙と、一緒に添へた五枚の繪葉書とを背景にして、成るべく近い機會に、奥の本箱にある『福翁自傳』の最初の百頁を讀んでくれ。



福澤諭吉舊宅

の右角に「是より二十一間福澤先生舊宅」と書いた五寸角三尺ばかりの花崗石の標柱が立つて居る。それを曲つて一丁ほど行くと、右側三軒目の門内に「福澤諭吉先生舊宅」と書いた、前と同じ太さ高さの花崗石の杣が立つて居た。入口の標札には「三原」と書いてある。此の歴史的家

瓦を戴いた六尺位の荒壁の築地。

式臺まがひの一尺幅の板。

屋の御守をする人の名前である。

まあどんな家だとお前は思ふ。吾々の郷里の家よりは、ズツと粗末な家だよ。細かい事は寫眞に譲るが、萱葺で南向に立つて居て、門の左右には瓦を戴いた六尺位の荒壁の築地が立つて居る。總じて間口は六間ばかり。其の築地の右の端の門口から入つて行くと、六七尺幅の入口がある。其處を這入ると、約一間幅の土間がづうツと續いて、下駄穿きのまゝで裏の畠へ抜けられるやうになつて居り、其の右側(東側)には炊事場、野菜置場、食物棚が順序よく並んで居り、而して左側が式臺まがひの一尺幅の板を繋ぎとして、直ぐに疊を敷いた座敷になつて居る。間取は先づ、取附

客間の床には、正面に先生の肖像を掛け、其の前に先生の塑像を安置し、右手北側の壁には、先生の眞蹟の軸を掛けてある。

が六疊、次ぎが九疊床付きの客間で、此の二室が南の日を受けて居り、そして其の北陰に六疊、四疊半の二室が並んで、これが北の裏庭に面して居る。總じて室數は四つ、建坪は土間を入れて二十六七坪には過ぎぬであらう。客間の床には、正面に先生の肖像を掛け、其の前に先生の塑像を安置し、右手北側の壁には「鳳皇云々」といふ五言絶句を書いた先生の眞蹟の軸を掛けてある。客間の南には三尺の板縁があつて、其の前の表庭は五坪ばかりあり、其處には三間ほど高い自然育ちの橙と山茶花とが簡素な風致を添へて居る。裏は梅、橙、其の他の雜木を隔て、直ぐに畑になつて居る。畑になつて間もない所が、もう裏隣との境である。

御辭儀をして來意を告げる。

小さい見すばらしい家。

これは無論案内されて、可なり委しく見た上での記事であるが、吾々は内部の床しさに素通りが出来なくなつて、例の納屋式勝手口の入口から案内を乞ふと、六十餘歳の品のよいお婆さんが出て來られた。御辭儀をして來意を告げると、

「それは、御殊勝によく御訪ね下さいました。此の通り小さい見すばらしい家ですけれども、先生のえらいお徳の爲めに、遠方から立派な御方様が始終御たづね下さいましてな。……まあ、御上りなすつて、御遠慮なく御覽下さい。」

と云ひつゝ、座敷に導いて、方々を見せながら懇ろに説明さ

散々に住み荒
す。

一太郎
福澤諭吉長男

れた。

「此の家はとうに福澤家の手を離れまして、前に住んで居た方が散々住み荒らされましたのを、此の頃になつて、大切に保存して置かなければならぬといふ事になりました。てな。……去年は一太郎さんが御見えになりました……」

と、『福翁自傳』の初めにあるやうな事を取り交へて、いろいろと話される。やがて「芳名録」といふやうな帳面を出して来て、「どうぞ御名前を」と云はれた。私は辭退せずに書いた。そして、暇を告げて歸らうとすると、お婆さんが呼び留めて、「もう一つ御目に懸けたいものが御座いますが、如何でせう、御急ぎでなければ。」

伽藍洞のお粗末
極つたもの。

と云つて、先に立つて裏庭に導かれた。隨いて行くと、母屋から二間ばかり離れた處に、西境に接して二間に二間半といふ塗籠ぬかごの小さい物置が立つて居る。繪はがきには「倉庫」と書いてある。成程、倉庫といへば倉庫、土藏といへば土藏だが、荒壁を厚く塗つた伽藍洞のお粗末極つたもので、まづ「厚塗總壁の物置」といふ方が至當であらう。

お婆さんは吾々を導いて此の物置の中に入られた。

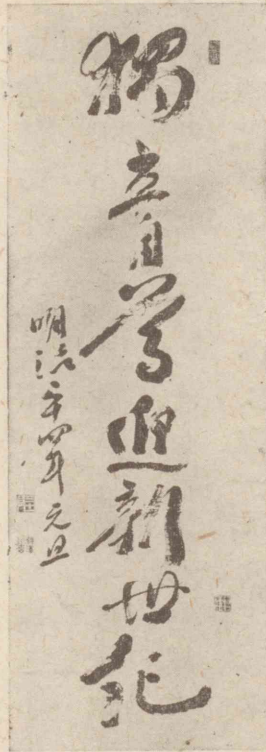
「此の土藏が、先生が御ちひさい時、御自分に壁を塗られたので、出来上がつてから、此の二階の窓の下で一所懸命に勉強なすつたさうで御座います。今入れてあるガラクタは皆後に來た人の物で御座いますが、建物だけはもと

壁は塗り放しで
板敷は荒削りの
隙間だらけであ
る。

獨立自尊迎_ニ新世
紀_一
明治三十四年
元旦

のまゝだと申します。」

二階に上がつて見ると云はれるので、上がつて見ると、屋根裏——天井などは無論ない——はこまなければ歩けぬ位に低く、壁はデコボコザラ／＼の塗り放しで、板敷は荒削りの隙間だらけである。東に面して鐵格子の嵌つた三尺四方の窓が切つ



福澤諭吉筆蹟

方のあるが、先生はこの窓の下で勉強された

のであらう。或時は強過ぎる日に射し込まれ、或時は薄暗い光に悩まされ、冬は明け放しの身に浸む寒さに打たれ、夏

かういふ艱難苦
勞が、一つはあ
あいふ立派な人
物を玉成したの
でもあらう。

金殿玉樓の與へ
得ぬ教訓。

百千卷の書物も
語り得ない深い
意味。

は一方口の風のない蒸し暑さに苦しめられつゝ、而も是等の困難苦惱に抵抗し打勝つて勉め勵まれたのであらう。そしてかういふ艱難苦勞が、一つはあゝいふ立派な人物を玉成したのでもあらう。僅か五坪の粗末な物置ではあるが、其の中には金殿玉樓の與へ得ぬ教訓を含んで居るではないか。百千卷の書物も語り得ない深い意味を語つて居るではないか。

此の土藏と母屋との間に一本の老梅がある。幹の大部分が朽ち去つて、脂氣のないジャカ／＼した皮の一部が、疎らに生えた梢の生活を支へて居る様子を見ると、もう百年以上になつて居るのであらう。お婆さんは此の老梅の下

て足を止められた。

「此の梅が此の通り老木で、此の屋敷の樹木の中で、是れだけが慥かに先生の御小さい時からあつたのだと申します。『秋梅』と申して、是れから秋にかゝつて熟する珍らしい梅ですが、記念に實を少々御持ちなさいまし。」

と云つて、七月の二十六日と云ふに、まだ眞青な小さい堅い實を五六箇もいてくれられた。

私はそれからいろいろの回想に耽りながら、國寶ともいふべき斯様な家屋の御守役として如何にも相應はしい、此のお婆さんに案内されつゝ、畑、井戸、臺所を見、前に見た土藏

いろいろの回想に耽りながら、此の家に「おさらば」を告げた。

をも、座敷をも、もう一度ざつと見直して、立ち去り難き此の家に「おさらば」を告げた。おさらばは告げたが、目の前には、しばらく此の小さい簡素な家が展開されて、心はいつまでも四つの座敷や、例の土藏、物置の中を徘徊して居た。

福澤先生は大きい人だ。私は福澤先生を英雄とも、豪傑とも、偉人とも、神とも、佛とも思はない。先生はうまれたままの平凡な完全な赤ン坊が、そのまゝ無事に、平凡に、完全に、ひねくれずに育ち上がつて、大きい人間になつたやうな人だと思つて居る。博士にならず、華族にならず、英雄にならず、豪傑にならず、超越した神にも佛にもならずして、唯だ何の奇も變もない大きい人間になつた所が、先生の面白い、難

先生は生れたままの平凡な完全な赤ン坊が、そのまゝ無事に、平凡に、完全に、ひねくれずに育ち上がつて、大きい人間になつたやうな人だ。

幕末から明治にかけて生れ死んだ無数の日本人の中で、最も人間らしい人間は先生だ。

有い、懐かしい所だと思つて居る。幕末から明治にかけて生れ死んだ無数の日本人の中で、最も人間らしい人間は先生だと思つて、常に愛着を感じて居る。

一寸と思つたのが、つい長くなつてしまつた。私は子供のお前に對しても教訓などをする力がない。唯だ見たままを書いて、お前にも成るべく私の見た通りを見せたいと思ふだけである。

折角泳いで眞黒になれ。左様なら。

〔遠近〕

一五 其の時の怖さ加減

福澤諭吉

極の西洋家。

成島柳北

幕末明治の文章

家定、家茂、將

軍の侍講

朝野新聞社長

明治十七年歿

年四十八

疵持つ身といふ譯ではないが。

維新前文久三四年頃、江戸深川六軒堀に藤澤志摩守と云ふ旗本がある。是れは時の陸軍の將官を勤め、極の西洋家で、或る日その人の家に集會を催し、客は小出播摩守、成島柳北を始め、其の外皆昔の大家と唱ふる蘭學醫者、私とも合はせて七八名でした。其の時の一體の事情を申せば、前に申した通り、私は十二三年間、夜分外出しないと云ふ時分、尤も自ら警めて内々刀にも心を用ゐ、能く研がせて斬れるやうにして居ます。敢て之れを頼みにするではなけれども、集會の話が面白く、ツヒく、怖い事を忘れて、思はず夜を更かして、十二時にもなつた所、座中みな氣が付いて、サア歸りが怖い疵持つ身といふ譯ではないが、いづれも洋學臭い

主人が氣を利かして、屋根舟を用意した。

新錢座
東京市芝區の町の名



福澤諭吉

連中だから皆怖がつて大分晩うなつたが如何だらうと云ふと、主人が氣を利かして、屋根舟を用意し、七八人の客を乗せて、六軒堀の川岸から市中の川、即ち堀割を通り、行く／＼成島は柳橋から上がり、それから近いもの／＼と段々に上げて、仕舞に戸塚と云ふ老醫と私と二人になり、新橋の川岸に着いて、戸塚は麻布に歸り、私は新錢座に歸らねばならぬ。新橋から新錢座まで凡そ十丁もある。時刻ははや一時過ぎ、然かも其の夜は寒

物騒とも何とも言ふにいはれぬ。

進退に都合の好いやうに趣向す。

其の男は大層大きく見えた。實はどうだか知らぬが大男に見えた。

い晩で、冬の月が誠に能く照らして、何となく物凄しい。新橋の川岸へ上がつて大通りを通り、自ら新錢座の方へ行くのだから、此方側即ち大通り東側の方を通つて四邊を見れば、人は唯だの一人も居ない。其の頃は浪人者が徘徊して、其處にも此處にも、毎夜のやうに、辻斬とて容易に人を斬るところがあつて、物騒とも何とも言ふにいはれぬ。それから袴の股立を取つて、進退に都合の好いやうに趣向して、颯々と歩いて行くと、丁度源助町の中央あたりと思ふ、向うから一人やつて来る、其の男は大層大きく見えた。實はどうだか知らぬが大男に見えた。「ソリヤ來た、どうもこれは逃げた所がおツ付かない。今ならば巡查が居るとか、人の家に駈け

早く来る

臆病な風を見せると付け上がるから、衝き当たるやうに遣らうと決心して。

込むとか云ふこともあるが、どうして／＼騒々しい時だから、不意に人の家に入られるものでない。却つて戸を閉つて仕舞つて、出て加勢しようなんと云ふものはないのは分り切つてる。「コリヤ困つた、今から引き返すと、却つて引身になつて、追つ駈けられて後ろから遣られる、寧ろ大膽に此方から進むに若かず、進む方には臆病な風を見せると付け上がるから、衝き当たるやうに遣らうと決心して、今まで私は往來の左の方を通つて居たのを斯う斜めに道の真中へ出掛けると彼方の奴も斜めに出て來た。コリヤ大變だと思つたが、もう寸歩も後に引かれぬ。いよ／＼となれば、兼ねて少し居合の心得もあるから、どうして呉れようか、こ

イザと云へば眞實に遣る所存。

背に腹は換へられぬ。

所が先方も抜かん、此方は勿論抜かん。

れは一つ下から匆ねて遣りませうと云ふ考へで、一所懸命、イザと云へば眞實に遣る所存で行くと、先方もノソ／＼遣つて來る。私は實に人を斬ると云ふことは大嫌ひ、見るのも嫌ひだ。けれども逃げれば斬られる、仕方がない、愈々先方が抜き掛かれれば背に腹は換へられぬ、此方も抜いて先を取らねばならん。其の頃は裁判もなければ警察もない、人を斬つたからと云つて咎められもせぬ。只だ其の場を逃げさへすれば宜しいと覺悟して、段々行くと、一步々近くなつて到頭すれ違ひになつた。所が先方の奴も抜かん、此方は勿論抜かん。所で擦れ違つたから、それを拍子に私はドン／＼逃げた。どの位足が早かつたか、覚えはない。五

實に怖かつたが
双方逃げた跡
で、先づホツと
呼吸をついて、
安心して、可笑
しかった。

こんな所で殺さ
れるのは眞實の
犬死だ。

六間先へ行つて振り返つて見ると、其の男もドン／＼逃げ
て行く。 どうも何とも云はれぬ、實に怖かつたが、双方逃げ
た跡で、先づホツと呼吸をついて、安心して、可笑しかった。
双方共に臆病者と臆病者との出逢ひ、拵へた芝居のやうで、
先方の奴の心中も推察が出来る。 こんな可笑しい芝居は
ない。 初めから此方に斬る氣はない、唯だ逃げては不味い、
屹と殺されると思つたから進んだ所が、先方も中々心得て
居る、内心怖々表面颯々として出て来て、丁度抜きさへすれば切
先の届く位すれ／＼になつた處で、身を翻して逃げ出した
のは、誠にえらい。 こんな處で殺されるのは眞實の犬死だ
から、此方も怖かつたが、彼方もさぞ／＼怖かつたらうと思

ふ。 今其の人は何處に居るやら、三十何年前、若い男だから、
まだ生きて居られる年だが、生きて居るなら逢うて見たい。
其の時の怖さ加減を互に話したら面白い事だせう。

(福翁自傳)

一六 俳句評釋

正岡子規

正岡子規
明治の俳人
名は常規
明治三十五年歿
年三十六

俳句の妙味は俗に説明すべからず。 されど字句の解釋
はさまで難きにあらず。 今初學のために二三の古句を解
説し、併せて多少の批評をなすべし。

わが事と泥鰯の逃げし根芹かな 丈草

芹は春のはじめのものなり。 芹摘みにと手を出したれ

丈草

芭蕉の高弟
内藤氏
寶永元年歿
年四十五

泥鰯を擬人して
軽くおどけたる
處、丈草の壇場
なり。

蓼太
嵐雪の孫弟子
大島氏
天明七年歿
年八十



正岡子規

ば、芹のあたりに居たる泥鰯の、捕へられんとや恐れけん、あ
ちらに逃げ隠れたりといふ意にて、泥鰯を擬人して軽くお
どけたるところ、丈草の壇場
なり。

世の中は三日見ぬ間に
櫻かな 蓼太

名高き句にて世の人大方
は知れり。誰れにもわかる

句にして、しかも理窟を含みたれば、世人には賞翫せらる。
されど理窟を含みたるもの必ずしも善くはあらず。此の
句、格調頗る下品なり。俗には「三日見ぬ間の」と傳へたれど

も、やはり「見ぬ間に」の方宜し。「の」とすれば、全く譬喩となり
て味少なく、「に」とすれば、櫻が主となりて實景となる故に、多
少の趣を生ずべし。

時鳥鳴くや雲雀の十文字

去來

時鳥は夏にして、雲雀は春なり。時鳥は春に鳴かざれど
も雲雀は夏も居るゆゑ、此の句は夏季となるなり。時鳥は
横一文字に飛ぶものにして、雲雀は下より上へ眞直に上る
ものなり。故に、ちやうど雲雀の上る處を時鳥が横ぎりて、
恰も十文字の如くなりたるをいへり。最も巧みなる句な
り。

砂川や枕のほしき夕涼

關更

去來
芭蕉の高弟
向井氏
寶永元年歿
年五十三

關更
高桑氏
寛政十年歿
年七十三

芭蕉
元祿七年歿
年五十一

砂川に出で涼み居れば、涼しくもあり、且つは餘り砂川の清らかさに、枕をかりて此の河原の砂の上に寝ころびたしとの意にて、輕妙なる句なり。

菊の香や奈良には古き佛たち

芭蕉

菊花と古佛との取合はせは、共にさび盡くしたる處、少しも動かぬやうに見ゆ。

此の句に於いて、菊と佛とは場所の關係なし。必ずしも佛の前に菊を供へたるにもあらず、必ずしも佛堂の傍らに菊の咲きたるにもあらず、強ひて場所の關係をいはず、菊も古佛も共に奈良にあるまでの事なり。作者の奈良に遊びし時、恰も菊の咲く頃なりしなるべく、従つて此の句を以て奈良をあらはしたるなるべしと雖も、菊花と古佛との取合はせは、共にさび盡くしたる處、少しも動かぬやうに見ゆ。

こゝ作者の活眼といふべし。

秋風や白木の弓に弦張らん

去來

夏時白木の弓に弦を張れば膠が剥げるとして、秋冷の候を待ちてするなり。故に「秋風や」と置けり。されども、そのみにては理窟の句にて些の趣味なし。蓋し弓は昔時に在

疾一斗糸瓜の水も
間にあはず
金氣の肅殺。

疾一斗糸瓜の水も
間にあはず
金氣の肅殺。

白色には神聖の感あり、肅殺の感あり。故に秋の色は白とす。

などとして妖魔を攘ふ儀式もあるくらゐなれば、金氣の肅殺たるに取合はせて自ら無限の趣味を生ずるを見る。況んや其の弓は白木の弓なるをや。白色には神聖の感あり、肅

嵐雪
芭蕉の門人
服部氏
寶永四年歿
年五十四

殺の感あり。故に秋の色は白とす。此の句、無雜作に詠み出でて男らしき處を失はず。有難き佳句なり。

蒲團着て寝たる姿や東山

嵐雪

さすがの都も冬
枯れて、見るも
のとして淋しく
寒からぬはなき
が中に。

是れは、實景を知らぬ人には其の味を解し難し。試みに京都に行きて、つくづくと東山を見るべし。低き山の近くに在りて、しかも頂の少しづつ、高低あるところ恰も人が蒲團を被りて寝たるに似たり。さればこそ此の譬喩的の吟ありたるなり。品のよき句にはあらねど、滑稽と輕妙とを以て勝りたるものにて、容易に摸倣し得べからず。また此の句につきては、多くの人の氣づかざる特色あり、そは冬季といふことなり。さすがの都も冬枯れて、見るものとして

其角
蕉門の高弟
榎本氏
寶永四年歿
年四十七

斬新を以て賞す
べし。

淋しく寒からぬはなきが中に、かの東山を見れば、これも春頃のなまめきたる様を失ひて、唯だひつそりと寒さうに横たはるところ、蒲團うちかぶりて寝たると見れば、淋しさの中に多少のをかしみもありて、何となく面白く感ぜらるなり。

我が雪とおもへば輕し傘の上

其角

普通には「我が物と思へば輕し傘の雪」として傳はれり。されど、「我が物」としては甚だ俗なり。「我が雪」の方に従ふべし。意味は解釋するまでもなし。此の句、斬新を以て賞すべし。若し之れを摸倣する者あらば、直ちに邪路に陥る事必定なり。

〔俳諧大要〕

一七 宿かりの死

志賀直哉

志賀直哉

小説家

白樺派に屬す

陸前石巻の人

明治十六年生

大きな榮螺の殻に入つてゐる宿かりが、岩の上から下に
澤山集つてゐるきしやごを見下して、

「小さいな。」と思つた。

「相變はらずウヂ／＼して居る。」と腹の中で冷笑した。

彼れは、以前自分がその殻の一つに入つて、仲間の様にし
て居た事を憶ひ出して、自分ながらよくもこんな大きく
なつたものだと思つた。

宿かりは勢よくきしやごを押し分けて岩を馳け下りる

己惚れた。

宙返りする。

大物

大きな者のみが
感じられる寛大
な心持。

と、一度宙返りをして、どぶんと海の中へ飛び込んだ。

「ワア！」と云ふきしやご共の笑ひはやす聲が聞えた。

「馬鹿共が。」かう思ひながら、彼れは
大きな者のみが感じられる寛大な心
持を味はひながら、海の底をのそ／＼

と歩いて居た。

彼れは傍らに何かゴリ／＼と云ふ

音を聞いた。

見ると、それは自分よりも大きな榮

螺がソロ／＼と岩を這ひ上つて行く所だつた。

彼れは急に堪らない恥かしさを感じた。



し く づ 貝

拔足差足其處を退いた。

ムカ／＼と腹が立つ。

やりきれなくなつた。

復命 = 向形

彼れは榮螺に見つからないやうに、拔足差足其處を退いた。

一人になると、彼れは急にムカ／＼と腹が立つて來た。而して直ぐ無理やりに自分の殻を脱いで了つた。

今度は砂地を、ソロ／＼と臆病に這つて行つた。柔かい尻が砂で擦れて、痛くてやりきれなかつた。

彼れは苦しんだ。一日一晚苦しんだ。そしてやりきれなくなつた時に、丁度其處に非常に大きな法螺貝の殻を見出だした。それは、昨日彼れをおびやかした榮螺よりも、更に大きかつた。

彼れは靜かに尻の方から其の中にもぐり込んで、やつと

安心した。

その貝は重く、且つ彼れの身體にはユル／＼だつた。が、かまはず苦しい思ひをして、それを曳きずつて歩いた。

彼れは又大きくならう／＼と云ふ欲望に燃え立つた。

一年程経つた。

而して彼れは驚くべき發育方で、其の法螺貝の中に一杯の大ききになつた。それを曳きずつて歩く事が、もう何の苦もなくなつた。

彼れは餘りイラ／＼しなくなつた。前程には大ききならうと云ふ欲望も燃え立たなくなつた。

その時彼れは偶然又素敵に大きな法螺貝に出ツくはし

欲望に燃える。

イラ／＼する。

た。

彼れは吃驚した。殆んど氣絶しかけた。

彼れは榮螺の殻に入つて居た時、大きな榮螺に會つた時よりも、倍の倍も自分を耻かしく感じた。

腹を立てるにしては、もう力が足らなくなつた。

彼れは全く自分に失望した。

自分がどれ程大きくなるにしても、其處には何時も自分だけの大きさの貝殻がなければならぬと思つた。彼れは全く絶望して了つた。

彼れは直様自分の入つて居た法螺貝を捨て、了つた。

彼れは又殻なしで、痛さを我慢して、そろ／＼と大病人の

自分に失望する。

やうに海底の砂地を這つて行つた。

時々、その傍らを、輕蔑するやうな横眼使ひをしながら、伊勢海老がピン／＼と勢よくはねて通つた。龍の落子がげんな顔をして、立止まつて彼れを見送つてゐた。

彼れはいよ／＼やりきれなくなつて來た。

それでもまだ何かを求めるやうに、海の底を一方へ／＼ズル／＼と、その柔かい腹綿の尻を曳きずつて歩いて行つた。

路々彼れが這入れる位の大きな法螺貝の殻にも出會つた。然し彼れは今更それにもぐり込まうといふ氣はしなかつた。

げんな顔を
して立止まつた。

彼れは極端に憂鬱になつた。

彼れは極端に憂鬱になつた。力もなえて來た。彼れはもう自分も死ななければならぬと思つた。何故自分の生涯の結末がこんなにならなければならなかつたらうと考へた。それよりも、何が唯だの宿かりで居られないやうな慾望を自分に與へたのだらう。而してそれは何の爲めだらうと考へた。

彼れがきしやごの殻にゐた頃の夢想は、疾うの昔に實現されたが、それは彼れに何の幸福をも持ち來たさなかつた。彼れは常に満たされずに來たのだ。

彼れの精神も肉體も段々にまるつて來た。とう／＼動けなくなつた。而して死んだ。

(荒絹)

精神も肉體も段々にまるつて來た。

一八 鳥島漂流記 その一

見渡せば目もとゞかぬ廣野原、その隅から隅まで一面に眞白な大鳥が竝んで居て、足の踏みどころも無い。其の夥しい鳥の間を、かき分けかき分け通り行く數人の男がある。髪は亂れ、顔は青ざめ、目はくぼみ、頬はこけ、やつれ果てた様子で、はぐれぬやうに、「ホウイ〜」と呼びかはしながら、南へ南へと進む。鳥の大きさは片翼をひろげただけで凡そ七八尺もあらう。人を怖れる氣色は少しもなく、押しつけらればさつと開くが、やがて歸つて來て前後に集まる。譬へば

鳥島
北緯三〇度二十八分
東經一四〇度一四分
阿呆鳥の多い小島
東西八町南北十三町ある

譬へば、鳥の翼の漫々たる波の間を七八個の頭顱が泳いで居るやうに見える。

鳥の翼の漫々たる波の間を、七八個の頭顱が泳いで居るやうに見える。

一行は、しばらくして廣野を歩きつくして、斷崖の上に立つた。向うを望むと、遙かの磯邊に、人の姿が唯だ一つ見える。一同は狂喜して蔓や木の根にすがりつゝ、やうやく山坂を下つて行くと、彼方も見つけて、出むかへて一禮した。

數人の者は聲を揃へて此の島の名を尋ねた。迎へた一人は、此の島が名もなき無人島で、自分も三年以前に吹き流されて、今までたった一人、生き甲斐もない月日を送つて居るといふ事を語つた。

風のまに／＼吹き流される。

時は是れ、天明八年二月の初め、處は鳥島の南岸。初めの數人は、大阪の舟子で、仙臺荒濱の城米を積み受けて下る爲めに、天明七年十一月二十八日相州の三崎を出帆したが、房州の鼻を廻り、九十九里の灘を走つて、其の夜の四時頃、犬吠岬の鼻へ差しかゝると、俄の大暴風に逢ひ、風のまに／＼吹き流されて、それから風浪に弄ばるゝこと一月餘り、辛うじて此の島山を見出だして上陸したのが、翌くる天明八年の正月晦日の事である。

彼等は久しぶりで地を踏んだことを喜んだ。そして解を繋ぎ、磯山のかげに小さい雨宿りを見つけて、夕飯には粥を拵へ、打ち揃つて久しぶりに落ちついた食事をした。さ

手足をもぎ取られた思ひ。

て翌くる日は無事に過ぎて、其の翌朝の事である。西風が強く吹くのに驚かされて、艇を見まはると、綱が摩り切れて舟が見えなくなつてゐた。皆々手足をもぎ取られた思ひがして驚いたけれども仕方がない。絶望の色は忽ち一同の顔にあらはれた。此の上は此の島に永住の覺悟をせねばならぬと思ふにつけても、故郷の事などが頻りに思ひ出されて、生きながらへた心地もなくなつた。其の中に米は益々乏しくなる。之れを補ふために濱邊をかけ廻つて磯貝を取つたが、或日上手の方に道らしいものを見つけて段登つて行く中に、岩のかげで古槍一枚、釣竿一本、草履一足を見出だした。さては此の島にも人の住むのかと、戀しく

生きながらへた心地もなくなつた。

なつて、其の人を捜すべく、翌くる日、早朝より握り飯を拵へ、前の道を慕うて上へくと進んだ。險阻な岩陰の焼石を踏み、萱薄を搔き分け、通り行くことしばらくにして、忽ち眼界の開けた所が、大鳥の隙間もなく竝んで居た、前の廣野であつた。

搔いつまんで話した。

大阪船の舟子等は搔いつまんで今日までのあらましを話した。話しかけられた男は、土佐の國の船頭、名を長平と云つて、三年前の天明五年二月に、他の水夫三人と共に、此の島に流れ着いた者である。流れついて命は首尾克く助かつたが、火道具の持ち合はせがなく、生魚生鳥を食つた爲めか、俄に健康を害し、乗組の三人はわづか二十日足らずの間

命は首尾克く助かつた。

に引きつゞいて落命し、長平只だ一人やうく、今日までは存命へたといふ。見れば面色は青く、眼は赤く、三年が間月代を剃らぬこととて、誠に此の世の人とも思はれぬ様子である。

長平はまづ此の島に穀類のない事、常食として第一には前の大鳥、次ぎには魚貝を用ゐる事、但し大鳥は夏の百日ばかりの間全く居なくなるので、冬の間一人前百羽程ほし上げて、夏の食料に蓄へておかねばならぬ事を語つた。そして先きに立つて一同を我が住居に案内した。無論見る影もない小屋である。火が無いので殊に淋しい。室の隅には大鳥の卵を四五立て竝べて、其の中に水を蓄へてあ

見る影もない小屋。

舌鼓を打つ。

つた。一個に三四合入るので、それを一個づつ、茶の代はりにと云つてすゝめた。扱其の夜は長平の小屋で語り明かし、それより互に一家のやうに心安くして、火にかけた鳥の料理に舌鼓を打ちつゝ十日ばかり逗留したが、大阪舟子の住居の方が、水や其の他の便宜がよいといふので、一同長平を伴つてもとの場所に立ち歸つた。

無人島のわびしい生活。

島の周圍は凡そ三里ばかりもあらう。段々と探るにつれて、此の無人島にわびしい生活をした者の、自分等だけではない事がわかつた。雨風を避け易い所、或は濱邊の洞窟などには、往々人の住んだらしい跡がある。或は風よけの石垣を築いた所がある。或は作物を仕つけたらしい所も

吾等がつひの運命も此の通りかと、人事ならず哀れを催した。

ある。ある洞穴の中には、鍋釜をはじめ世帯道具の腐つたのが半ば土に埋もれてあり、三尺ばかりの朽ちかけた板には、南部行の遠州船が元文三年正月漂着したといふ趣の文字があつた。ある穴の中には、幡、天蓋、珠數などを入れた櫃があり、其の傍らに枕をしたまゝで横たはつて居る白骨があつた。見るにつけて、吾等がつひの運命も此の通りかと、人事ならず哀れを催して、石塔を建て、心ばかりの供養をした。

一九 鳥島漂流記 その二

旅は道づれ。

待ちこがれる。

旅は道づれともいふ。無人島に居て戀しきは人待たるるは船である。彼等は明けても暮れても海面を望んで、「船が來ぬか、見えぬか。」と待ちこがれてゐたが、三年目の正月のある日、乗組六人の薩州船が漂着した。此の船人の話によつて、始めて此の日が寛政二年の正月晦日であることを知つた。

薩摩船の漂着によつて、舳が手に入つた。枯木の春に逢うた心地で、今度こそ波に取られぬやうにと、丈夫に繫いだが、やがて荒磯に打ち碎かれた。掌中の寶はまたも奪はれて、若しやの頼みもあだとなつた。何といふ拙い運命であらう。

非常。大物。三。ハ。物。掌中の寶は又も奪はれて、若しやの頼みもあだとなつた。

器量を上ける。

薩摩船の漂着によつて幸福を増したのは、硯、筆、墨、鑿、鋸、斧、金槌、其の他の小道具の殖えたことである。鍋や釜もふえた。剃刀も此の時手に入つて各、俄に器量を上げた。

薩摩船の舟子が來てから、一つ穴の住居も狭くなつたので、二人三人づつ別々の穴に住まふことにした。かくて數個の小家族が成り立ち、吉凶音間の慰めなども出て來て、小さいながら一つの郷黨を見るやうになつたが、世の果敢なさは此處も同じく、病死する者がおひ／＼に出て來た。有り餘る人の中でも死別はつらい。況して是れは總勢やうやく十八人の孤島生活である。一人だにあるを、僅かの間に四人まで失つた一同の悲嘆は、言葉に盡くされなかつた。

吉凶音間。

火の消えたやうに淋しくなつた。

中でも人々に力を落さしたのは、荒磯生れの忠八といふ舟子の死亡したことであつた。此の男は賑やかな質で、歌も歌ふ、三味も弾く、常に絶望仲間の慰め手として、一同の氣を引き立て、居たが、それが死んでからは、火の消えたやうに淋しくなつた。

是れ屈竟と。

彼等の夢寐にも忘れぬのは故郷の事である。昔話に雁の音づれといふ事もあるものを、何かな吾等の有様を故郷人に知らせる工夫はあるまいかと考へたが、或時例の大鳥の中に、首に繩をかけたものがあるのを見出だした。是れ屈竟と、早速木札を百枚程造り、漂着の次第を書いて鳥につけて放したが翌年になつて一羽も歸つて來なかつた。思

世の味氣なさを
覺えた。

ふ事、試みる事が、悉く失敗して、しみじみと世の味氣なさを
覺えたが、それにつけても罪深く感ずるのは、毎日に多くの
鳥を捕へる事である。食物がなければ止むを得ぬとはい
ふものの、かやうな殺生をせねばならぬといふのも、前世の
因果であらう。一人一日一羽づつとしても、一日には十四
五羽を殺す。一年には五六千羽、十年つもれば五六萬羽、此
の鳥の思ひだけでも安き往生は遂げられまい。萬一故郷
に歸ることもあらば、鳥類は決して食ふまいと神佛に願を
立て、珠數を拵へて時々念佛を唱へ、精進日を定めて、其の日
は一日鳥を食ふことを休んだ。かくして心ならずも罪と
知りつゝ、殺生を事として居る間に、或日、日蓮宗の御札が流

前世の因果。

前の世の中で
死したたらば

後の世の中で
生かる

千歳一徳
期

盲龜が浮木を得
たやうに喜ぶ。

盲龜
浮木

手の利いた男。

待てどもく、便
船のたつきがな
い。

れ寄つた。一同は之れを見て盲龜が浮木を得たやうに喜
び、皆々法華宗の信徒になり、札の流れよつた處に堂を建て
て厚く供養した。
大阪船の舟子に三之助といふ者が居つた。手の利いた
男で、或時、寄木を集め、斧一挺の細工に、長さ三尋程の釣船を
造つたが、これが種となつて、本國歸航の大船を造る計畫が
企てられた。
十年このかた待てども待てども便船のたつきがない、あ
てにならぬ事を當てにして此の島に朽ち果てるよりは、吾
吾の手に成る限りの大船を造つて本國に歸る工夫をして
はどうか。と一人がいふと、叶はぬ迄もと、皆々熱心に賛成

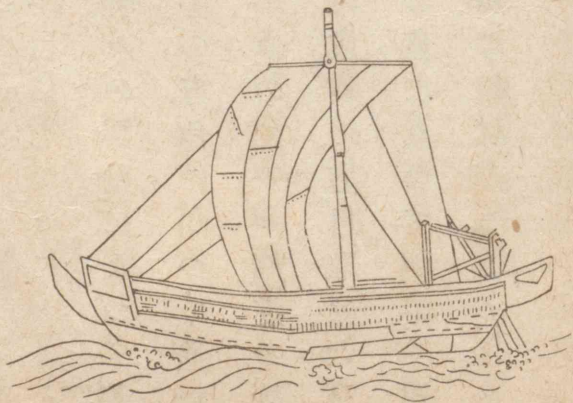
一所懸命に工夫する。

した。それから木寄せに取りかゝつて、四方の浦々から寄木を北湊へかつぎよせた。僅かの小さい鋸で之れを挽き割るのは、容易な事ではなかつた。さて久しい間非常な勞力を費して、板はやうやく挽いたが、困つたのはふいごや鍛冶道具の無い事である。しかし是れがなければもはや何事も出来ないのので、一所懸命に工夫したが、遂に大鳥の羽を革の代はりに用ゐて鞆を造つた。次ぎに平らな石を金敷にし、斧をたがねにしてあらまし道具を整へることが出来た。これからはいよゝ船の仕組である。得手により仕事を分擔して、無駄骨を折らぬやうにせねばならぬ。まづ船大工には三之助を棟梁として若手を付け、食物掛には老人

神様の御心
をもちます

額を鳩めて相談する。
思案にあぐむ。

を使ふことにした。其の他の面は八方に奔走して材料を集めたが、一から十まで流れ寄つたものを集める事とて、容易に揃ひやうがない。釘があれば木がない、木があれば釘がない。無い時はいつも神慮に任せて一心に祈念したが、不思議にも必ず得物があった。ある時の如きは、釘が盡きて如何ともしやうがない。一同仕事を休み、額を鳩めて相談したが、思案にあぐんで、祈りをして、濱邊にゆくと、丁度汐干の頃で、遙かの沖の石の間



深流の作のたつ船

着手のそもくから三年目。

精進を積む。

に何やら妙な形の物が見える。怪しんで石を除けて掘り出して見ると、古碇であつた。これで十分に釘を拵へて、頻りに工事を急いだ。かくて着手のそもくから三年目にして、とにかく一艘の帆船が出来上つた。此の上は神々の冥助（まがすけ）によつて、恙なく本國に歸らねばならぬ。何日どの方角に向つて進むがよいか、神々の御示しに従はうといふので、一同精進を積み身を清めて御くじを引くと、方角は戌亥の方、日取は六月の八日と現はれた。待ち兼ねた其の日になつて、朝早く起き出でて見ると、天の恵みか、南の方から順風がそよくと吹いて居る。

青ヶ島
八丈島の南三十海里

須川邦彦
東京高等商船學校教授

アナカーシス
ソロン時代の人
或はギリシア七賢人の一人に數へらる。

時は寛政十年六月八日の朝、無人島の漂流者は順風に帆を上げて、島の北湊を出帆した。總勢十四人、淋しいながら、住んではさすがに別かれの惜しまるゝ島を後ろにして、櫓拍子勇ましく漕ぎ出した。かくて九日には青ヶ島に着き、七月八日、公の船に送られて海路恙なく各夢にのみ見た故郷の人となつた。

二〇 海の迷信

須川邦彦（講演）

希臘の遠い昔に、アナカーシスといふ學者があつて、「海行く者に取つて、四時下が死の國である。」と申しました。四時

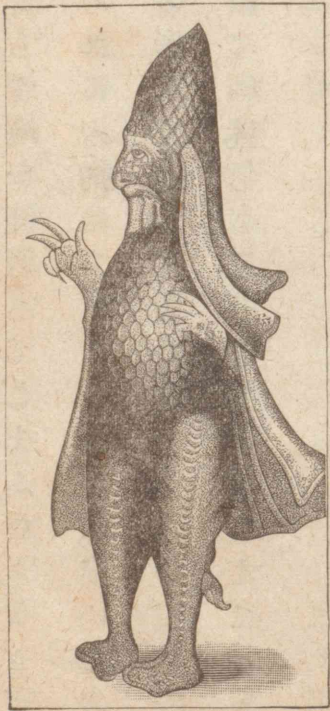
海行く者に取つて、四吋下が死の國である。板子一枚下は地獄。符節を合はす。

とは船底の板の厚さを云つたので、つまり厚さ四吋の船板がこの世とあの世との境だと言ふのです。「板子一枚下は地獄」といふ日本の諺と相對して、東西すつかり符節を合はせて居ります。

斯様に海を恐れた結果、海上生活者の間には、熱烈なる一種の信仰と迷信とが起こつて來ました。今から約四百年前、天文十六年に大内氏が制定した船條目、それは現代的にいへば、支那貿易船條令とでもいふべき支那渡航者の心得を書いたもので、二十八ヶ條ありますが、その第一條に、渡航中は航海安全を一心に神佛に祈れといふ意味が書いてあります。歐羅巴の諺にも、神信心をしない者は海へ出して

苦しい時の神だのみ。

やれといつて居ります。言ふまでもなく、苦しい時の神だのみで、海に出れば、どんな亂暴者でもきつと神佛に縋る心が出るといふところから云つたので、是等の諺を味はつて見ても、昔の人の海に對する心持が窺はれます。今日では、大西洋に、あの東京驛がスッポリと中に這入つてしまふやうな大きな船が、四艘も五艘も定期航海をして居ります。さうして海上の浮城ともいふべき、あのやうな大船に乗るより以上に贅澤な安全



主坊海の洋西

海に對する人間の智慧は遠からず海を征服する

搔い摘まんで簡単に記す。

な旅行はないと考へられて居ります。そして海に對する人間の智慧は、遠からず海を征服してしまふだらうと言はれて居ります。それにも拘はらず昔からの數多い海の迷信が、今尙ほ色々な形式で残つて居るのが面白いではありませんか。その數多い迷信の二三を搔い摘まんで簡単に記して見ませう。

まづ、海の神様は汚れたものが御嫌ひで、船に汚れたものを乗せて居るときつと大時化オホトキワに出遭ふと、昔の日本人は信じてゐました。特に綺麗好きな神様の居られる駿河灣の口を横切る時には、四足その他の汚れたものを積んではないらぬと、固く戒めたものでした。又時化に遭ひ、船が危くな

つて神佛に助けを乞ふ時は、波風の全く靜まるまでは、どんなに長びいても、不淨のものを決して海に流さないことになつてゐました。これは不淨で海を汚すと、海神の怒りに觸れると信じたからです。

また我が國では、「一人女に一人坊さん」と言つて、女や坊さんが、たつた一人船に乗るときつとしけると言つて、大變に嫌つたものでした。西洋でも同じ様に、昔は女を海に連れて行くとき、悪い事があると信じたものです。此の迷信は餘程深くしみ込んだものと見えて、有名な英吉利の探検家が失敗した時に、世間では、その船の中にきつと女が乗つてゐたに違ひないと考へた位でした。

亞米利加や歐羅巴の海員の間には、身體に入墨をするのが、海の悪魔を攘ふ呪禁になると信ぜられて居ます

亞米利加や歐羅巴の海員の間には、身體に入墨をするところが、海の悪魔を攘ふ呪禁になると信ぜられて居ます。それで面白いことに、先年の歐洲大戰爭中、獨逸の潜水艦が暴れた時には、遭難除に入墨をする事が大層はやりました。殊に豚の形を入墨すると、溺死の憂がないと云つて、あの鈍重な動物の入墨が特に歓迎されたといふことです。豚に就いては、まだ面白い話があつて、船では航海中の食糧として、船中に豚を飼つて置くことがあります。その豚を屠る時に、頭を西北の方向に向けると、船に都合の好い追風が吹き出すと、歐洲の海員の間には信ぜられて居ます。

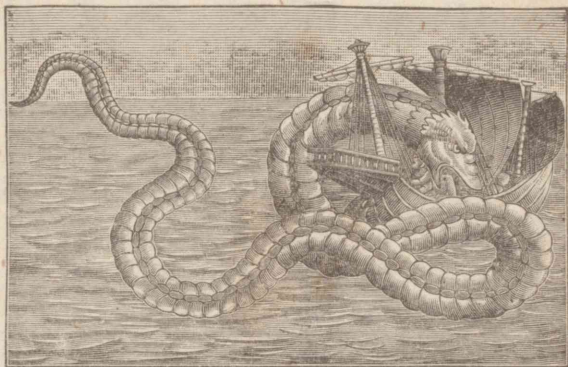
日本の大和船時代には、船の中で蛇の話をすることを忌

みました。これは海の神様が蛇を御嫌ひだと信じたからです。今でも地方の漁船などには、堅くこの物忌を守つて居るものがあります。また、此の逆を行つたのは、昔日本へ來た支那の貿易船で、彼等は「百足旗」と言つて、百足の形に作つた非常に大きい旗を檣に上げて航海をしたものでした。その旗は長さが三丈二尺五寸、幅が二尺四寸、胴中が黄色で、頭と尻尾と兩側に並んで居る澤山の足とは、皆赤色でありました。これは、百足は蛇よりも強いから、大百足の旗を上げて置けば、大蛇や悪い龍が船を襲はないといふ呪禁であつたのです。

歐羅巴の海員の間には、海の大蛇は金銀財寶を好むと信

歐羅巴の海員の間には、海の大

蛇は金銀財寶を好むと信ぜられ地中海では、金銀財寶を持つて航海すると、大蛇に襲はれる危険があると云ひ傳へられて居りました。



歐州海員の迷信する海蛇

ぜられ、地中海では、金銀財寶を持つて航海すると、大蛇に襲はれる危険があると云ひ傳へられて居りました。朝鮮では、これに反して水中に住む鬼は金銀が嫌ひなので、海河を渡る時に、金銀を身に着けるか、又はそれを持つて渡れば、魔除けになり水難を免れると言はれてゐます。之れに類した事に、昔日本では美しい着物を着て船に乗ると、海の神様の怒りに觸れて大じけに遭ふやうな危険があると信ぜられてゐました。紀貫之が土佐日記の一節にも、

紀貫之
平安朝の歌人
天慶九年歿

土佐日記
承平四年十二月
貫之土佐守を罷めて歸京する時の日記

これに類した事が書いてあります。霧は航海の大障碍ですが、昔我が國では、霧に包まれて角が知れなくなつた時に、生の豆を噛み碎くか、又は摺鉢で摺つたのを、口に含んで船の周圍に吹き散らすと、霧が晴れて四方が見えて來ると言つてゐました。この豆の呪禁に就いては、日露戦争中にも實驗して効果があつたと傳へられてゐます。それは上村艦隊が成田山から寄贈された霧除豆を海上に撒き散らすと、折しもの濃霧が幕を引くやうに晴れたといふことで、しかも二度まで試みて二度まで著しい經驗があつたといふことです。鱺は海の虎と言はれて何にでも噛みつく亂暴ものです

日本の昔の漁夫は、鱧を恐れて、竈の灰を海に捨てないやうにしたものでした。

が、日本の昔の漁夫は、之れを恐れて竈の灰を海に捨てないやうにしたものでした。それは、鱧は目が小さく、近眼で、その上大層執念深いものであるから、灰を海に捨て、それが若し鱧の目に這入ると、執念深くつけ狙つて、難船の場合や、泳いでゐる時などに噛みついて、怨みをはらすと信ぜられたからであります。西洋型の帆前船の先の方に斜めに突き出た棒があります。そしてその先に小さい皮のやうなものがあり居るのを見ることがありますが、あれは鱧の尻尾です。西洋の水夫は、昔から鱧の尻尾は幸福の標示で、それが船に附いてゐる間は、魔障に逢ふことなく、愉快な航海を続け得ると信じてゐました。又どうかすると、櫓の

頂に鱧の尻尾が釘で打附けられてゐるのを見ることがあります。

海や船に關する迷信は、東西古今に亘つて、此の外にも無數にあります。が、さすがに人間の恐怖を集めた方面のものだけあつて、それづくに人を惹きつける面白味を持つてゐます。

二一 空

海にして太古の民のおどろきを

われふたゝびす大空のもと

高村光太郎

高村光太郎
彫塑家、文學者
東京美術學校出身
明治十六年生

島木赤彦

歌人
本名久保田俊彦
長野縣の人
昭和二年歿
年五十一

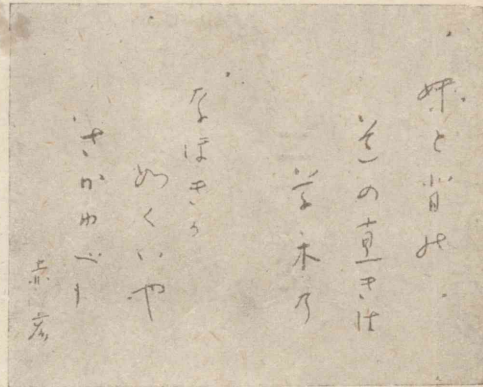
妹と背の道の直きは草木のなほきが如くいやさかゆべし
赤彦

金子薫園

歌人
名は雄太郎
東京の人
明治九年生

與謝野晶子

歌人、文學者
故寛氏夫人
大阪府堺の人
明治十一年生



島木赤彦筆蹟

島木赤彦

落葉松の萌黄の芽ぶき

煙りつゝ陽は闌たけなほとなり

なりにけるかも

金子薫園

武藏野の風の夜に來て

落葉のさびしき音を

きゝつくしけり

與謝野晶子

磐梯の山をとゞると鳴らし來て

みづうみに入る白き横雨

與謝野寛

文學者、歌人
鐵幹と號す
京都の人
昭和十年歿
年六十三

尾上柴舟

歌人、文學者
文學博士
名は八郎
岡山縣の人
明治九年生

うるはしき冬にしあるかな獨りさびしくこもれる部屋にけふも夕日す

若山牧水

歌人
名は繁
宮崎縣の人
昭和三年歿
年四十四

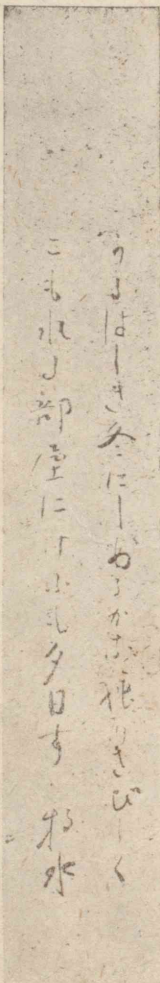
阿蘇の山けぶりわき立ちのどかにも

筑紫の空のしら雲となる

尾上柴舟

夕靄は青く木立をつゝみたり

思へば今日はやすかりしか



若山牧水筆蹟

雲ふたつ合はむとしてはまた遠く

わかれて消えぬ春の青空

若山牧水

長塚節

歌人、小説家
茨城縣の人
大正四年歿
年三十七

長塚節

みやこ草更紗染めたる草むしろ

しづかにぬれて霧雨ぞ降る

古泉千櫨

古泉千櫨

歌人
名は幾太郎
千葉縣の人
昭和二年歿
年四十二

ふりすぐる夕立雲はいや暗く

鹿野のみ山をおほひけるかも

窪田空穂

窪田空穂

歌人、文學者
名は通治
長野縣の人
明治十年生

星滿つる今宵の空の深緑

かさなる星に深さしられず

安か羅密多朝日ニ對ふ朝霞之
波ふけや古々乎和乳者思はれ左夫

伊藤左千夫

あから曳く朝日に
對ふ朝霞のはかな
きことをわれは思
はず

左千夫

伊藤左千夫

明治末の歌人
名は幸次郎
千葉の人
大正二年歿
年五十一

伊藤左千夫

天雲の切れめさやけみ月すみて

隅田の水かみ雁なきわたる

二二 備後疊

橘南谿

橘南谿

醫者、旅行家
伊勢の人、宮川
氏、名は春暉、
字は惠風、梅仙
とも號す。
文化二年歿
年五十二

野服を着し、方
頂巾を戴く。

備後國を通りし時、百姓と見えし年老いし男二人、ふと道
連れになり、山の名、里の風俗など尋ね問ひて、行きたりしに、
我が野服を着し、方頂巾を戴きしを怪しみて、「いかなる人に
て、いづくよりいづくへ行き給ふにや」と問ふに、「都方の醫者
なるが、醫術修行のために諸國を遊歴するなり」と答へしか

露ばかりの験もなし。

山深き片田舎。

ば「扱も頼もしき御人や。我等が住む里は向うの山の奥なるが親しき家の女房に奇妙の難病ありて、はや二年になれるが、近きあたりに住み候へば、聞くもいぶせく、其の家にてもいろく」と醫療盡くさざることもなければ、露ばかりの験もなく、今ははや命さへ危く見え候ひぬ。かく山深き片田舎にて、名高き醫師も候はず、あはれ都近くもあるならば、など、親類の者は歎き居り候ひぬ。今日ははからずも京都の御醫と承り候へば、親類共が常々の詞も思ひ出だし候ひて、あはれにも候へば、何とぞ脈ばかりにても取らせ給ひて、彼等が心をも慰めたまはらばや」と、誠の心言葉に出でて、又餘儀もなく見えたりしかば、余も此の道修業の事なれば、い

程も知れぬいたづら事。

あすはまた此里だにもしのばれむ今日は昨日のゆく末の旅 春暉

とある山あひの淋しき里。

と易き事なり。とうけがひて、彼の者共のしりへに従ひて、尾の道の二三里ばかりこなたより右の方に分け入る。

鹿狼の通ふ如き細道を、谷に下り峰に上りて、行けども行けども程遠きに、腹饑る足疲るれば、僕腹立て、程も知れぬい

旅

あすはまた此里だにもしのばれむ今日は昨日のゆく末の旅

蹟筆 嶺南橋

たづら事とつぶやく。とかうなだめて行く程に、やうくに到り着きぬ。とある山あひのいと淋しき里にて、本郷といふ處なり。

其の家に入れば、病者は五十ばかりなる女にて、其の夫を

しかぐの由。

六兵衛と云ふ。案内の者しかぐの由をいへば、家内皆驚き悦び、去年の冬より難治の病に罹りしが、次第に重りて、果ては腹裂くる心地して、苦しみ譬へむかたなし。日々月々に病つものり、春の頃よりは一しほにて、横に臥せば下腹一しほ裂くるが如く、立てば苦しく、坐すれば堪へ難し。それゆる晝夜唯だ火燵のやぐらに兩手をつかへ、立ちながらうつむきて居る事のみ、少し心やすらかなるやうなれば、春以來は片時も坐せず、臥せず、唯だ晝夜食事にも眠るにも此の通りなり。其の苦しみなかくいふも愚かなり。近き頃は殊にあしければ、命の限りも遠からじと、一日も早く臨終をのみ待ち侍るなり。命の事は助かるべくも思ひ侍らねど、

なかくいふも愚かなり。

苦しみの聲隣を動かす。

都の人と承ればゆかしくこそ候へ。何とぞ一日なりとも、此の苦しみを助けたまはりて、横にふして安らかに臨終を得しめたまはゞ、上も無き御恵み。と涙を流せるさま、げに見るさへあはれなり。晝夜立ちてうつぶし居れば、足は柱の如く、腫氣ありて、顔もまた眼ぶちはれ、額も浮きて、生きたる人の如くにもあらず。一しきり腹はり來たる時は、苦しみの聲隣を動かし、聞く者すら堪へかねたり。病體は誠にかくの如く危く甚だしけれど、其の脈に見どころありければ、いそぎ薬を與へ、猶ほ薬湯を以て腰より漬し、種々の療術を用ゐしかば、やがて通利出で來て、始めて横さまに成ることを得たり。尙ほしなぐの療治を加へ、此の以後に用ゐる

三原
備後御調郡
淺野氏の國番城
のあつた所

藥方を委しく書き記し、用ゐる方などまでもくはしく傳へ置きて、其の家を辭して、數里の深山をわけ出でて、三原の城下に着きぬ。

三原にて此の物語をせしに、扱も危き事なりき。御心に誠ありぬればこそ佛神の助けもありて、まことの事に逢ひ給ふならぬ。多くは、かくの如き事は、盜賊のいつはる事に、旅する人を人なき深山に連れ行き、さし殺して金銀衣類を奪ふ事珍らしからず。此の後は、必ず疎忽の振舞し給ふべからず、といひけるにぞ、始めて心づきて恙なかりし事の嬉しかりき。

疎忽の振舞。

それより諸國をめぐり、二年を過ぎて京に歸り居たりし

手がかりもなき
尋ねやう。

に、或日六條の旅宿のあるじ訪ね來り、「一兩年以前九州へ赴きたまひし御醫者はこなたなりや」と問ふ。「いかなる用ぞ」と聞けば、「備後國より六兵衛といふ百姓一人のぼり來り、下に市の字の附きたる御醫師を聞き及ばずや。何とぞ尋ねくれよ。去々年しかくの事にて高恩にあひぬれば、御禮のため來りたり。其の御名は聞かざりしかども、荷物の下げ札に市の字を見及びたりといふ。手がかりもなき尋ねやうかなと存じ候へども、其の志の殊勝にも候へば、先づ試みに標札を見めぐりて、市の字を見當たり候へば、お尋ね申すなり」といふにぞ、其の事あり。といへば、則ち歸りて、其の次ぎの日、彼の六兵衛同道して來りつゝ、備後疊を自ら持ち

不思議の御縁。

て禮物とし、^さても過ぎし年は不思議の御縁にて、妻なる者御療治に逢ひ、命は無きものと覺悟致し居り候ひしを、其の日より驗を得、仰せ置かれし日限の如くに、かゝる難病平癒して、再び常體の人となれる事、殊に近處の者の行き逢ひより始まりて、御名さへ承らず候へば、弘法大師の來らせ給ふなりとのみ、一村の評判にこそ致し候へ。京を尋ねたりとて逢ひ奉るべしとは圖らず候へども、命助かりし御高恩、一言の御禮も申さざる心の中も安からず、もし逢ひ奉る事なくは、東寺にても参り候うて弘法大師様へ御禮申し歸るべしと存じ極めて参り候ひしなり。先づは尋ね當たりて日頃の本望に叶ひ候ふなり。とて、眞實顔色にあらはれたり。

邊土の民の篤實なる事、感ずるにも猶ほ餘りあり。

予も嬉しくて、暫しもてなし慰めて歸しやりぬ。都近くの者ならましかば、百里に餘れる海山をいかではるく尋ね來るべき。邊土の民の篤實なる事、感ずるにも猶ほ餘りあり。

〔西遊記〕

二三 大西郷の大度

勝海舟

西郷の大度洪量に就いて、維新當時の事を少し細かに話さう。官軍が品川まで押寄せて來て、今にも江戸城へ攻め入らうといふ際に、西郷はおれが出したわづか一本の手紙の爲めに、芝田町の薩摩屋敷まで、のそく談判に遣つて來

勝海舟
舊幕臣
初め從五位安房守、後に樞密顧問官
伯爵
名は麟太郎、後安芳と稱す
明治三十二年歿年七十八

た。かういふ事は、なかく、今の人には出来ない事だ。

あの時の談判は實に骨だつた。官軍に西郷が居なければ、話はとても纏まらなかつたらうよ。その時分の形勢といへば、品川からは西郷などが来る。板橋からは伊地知などが来る。又江戸の市中では、今にも官軍が乗込むといつて、大騒ぎをしてゐる。



西郷南洲

しかしおれは外の官軍には頓着せず、たゞ西郷一人に眼をつけた。

伊地知
名は正治
明治元年東山道
先鋒總督參謀と
して東征す
宮中顧問官
伯爵
明治十九年歿

おれは外の官軍には頓着せず、たゞ西郷一人に眼をつけた。

そこで今話した通り、ごく短い手紙を一通やつて、双方何處でか出會つた上、談判致したいといふ旨を申し送り、また



勝海舟

其の場所は、田町の薩摩の別邸がよからうと、此方から選定してやつた。すると官軍からも早速承知したと返事をよこして、い

よく、何日の何時に、薩摩屋敷で談判を開く事となつた。當日おれは、羽織袴で馬に騎つて、從者を一人連れたばかりで、薩摩屋敷へ出掛けた。まづ一室へ案内されて、暫らく

西郷はおれのいふ事を一々信用してくれ、その間一點の疑念も挿まなかつた。

自家撞着

待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引つ切下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て来て、「これは實に遅刻しまして失禮」と挨拶しながら、座敷に通つた。その様子は少しも一大事を前に控へたものは思はれなかつた。

さていよいよ談判になると、西郷はおれのいふ事を一々信用してくれ、その間一點の疑念も挿まなかつた。「色々むづかしい議論もありませうが、私が一命にかけて御引受します。」西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈も、その生命と財産とを保つ事が出来、又徳川氏も滅亡を免れたのだ。若しこれが他人であつたら、「いや貴様のいふ事は自家撞着だ。」

山行全ク藥ニ勝ル。連日晴ト期ス。兎ヲ追ヒテ栖伏ヲ披キ、葵ヲ驅リテ險夷ヲ忘ル。歸來常ニ食ヲ節シ、浴後疲ヲ知ラズ。道ヲ休メヨ獵遊ノ事ト。只少壯ノ時ニ宜シ。

南洲

西郷はそんな野暮は云はなかつた。その大局を達観して、而も果斷に富んで居たには、感心した。

とか「言行不一致だ。」とか「澤山の兇徒がああ通り處々に屯集して居るのに、恭順の實は何處にあるか。」とか、色々喧しく責め立てたに

山行全ク藥ニ勝ル。連日晴ト期ス。兎ヲ追ヒテ栖伏ヲ披キ、葵ヲ驅リテ險夷ヲ忘ル。歸來常ニ食ヲ節シ、浴後疲ヲ知ラズ。道ヲ休メヨ獵遊ノ事ト。只少壯ノ時ニ宜シ。

西郷南洲筆蹟

違ひない。萬一さうなると、談判は忽ち破裂だ。しかし西郷

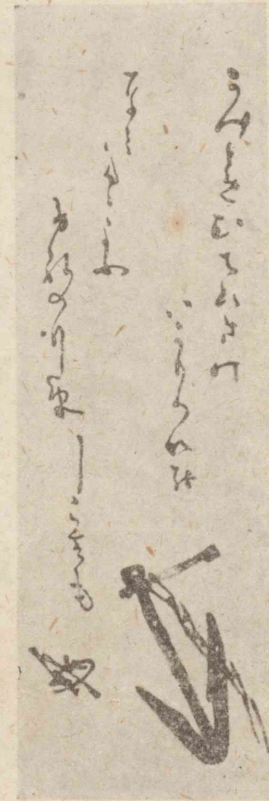
はそんな野暮は云はなかつた。その大局を達観して、而も果斷に富んで居たには、おれも感心した。

この時の談判がまだ始まらない前から、桐野などいふ豪

桐野
名は利秋
鹿兒島の人
明治十年隆盛に
従つて兵を擧げ
敗れて自殺す。

西郷は泰然とし
て、あたりの光
景も眼に入らな
いものやうに
に、談判を仕終
へてから、おれ
を門の外まで見
送つた。
かけとめむ千引の
鎧網をなみたゞよ
ふふねの行衛知ら
ずも

傑連中が大勢で次ぎの間へ来て、窺かに様子を窺つて居る。薩摩屋敷の近傍へは、官軍の兵隊がひしくと詰めかけて居る。その有様は實に殺氣立つて物凄いものであつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景も眼に入らないものやうに、談判を仕終へてから、おれを門の外まで見送つた。



勝海舟筆蹟

まで見送つた。おれが門を出ると、近傍の街々に屯集して居た兵隊が、どつと一時に押し寄せて來たが、おれが西郷に送られて立つて居るのを見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行

西郷はおれに對して、幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも、始終座を正して手を膝の上に載せ、少しも戦勝の威光を以て敗軍の將を輕蔑するやうな風を見せなかつた。

天空海闊

つた。おれは自分の胸を指して兵隊に向ひ、いづれ今明日中には何とか決着致すであらう。決定次第にて、或は足下等の銃先にかゝつて死ぬこともあらうから、よくよくこの胸を見覚えおかれよ、と言ひ捨て、西郷に暇乞をして歸つた。
この時おれが殊に感心したのは、西郷がおれに對して、幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも、始終座を正して手を膝の上に載せ、少しも戦勝の威光を以て、敗軍の將を輕蔑するといふやうな風を見せなかつた事である。その膽量の大きいことは、所謂天空海闊で、見識ぶるなどいふ事は固より少しもなかつた。

〔氷川清話〕

徳富蘆花
名は健次郎
熊本縣の人
小説家
昭和二年歿
年六十

二四 吾が家の富

徳 富 蘆 花

宇宙の富は殆ど
三坪の庭に溢
る。

家は十坪に過ぎず。庭はたゞ三坪。誰か「狭くして
且陋なり。」と。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狭きも碧
空を仰ぐべく、歩して永遠を思ふに足る。
神の月日はこゝにも照れば、四季も來り見舞ひ、風、雨、雪、霰
かはるゝ、到りて興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴
き、小鳥來り遊び、秋蛩亦吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は
殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。
庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花

奥 叟

紅雨霏々白雪紛々
見るが内に満
庭花の衣を著
く。

瓣 辨、辨

宜なりけり、
モトモト馬。

手水鉢

開いて樹に滿つ。風ある日には、薄く霞める空より白き花
ちら／＼と舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。
隣家に花樹多し。風に隨ひて飛花吾が庭に落つ。紅雨
霏々、白雪紛々、見るが内に満庭花の衣を著く。仔細に見れ
ば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花、山吹の花あり、李の
花あり。

庭隅に一株の山梔あり。五月間、鬱陶しき頃、かうばしき
白花を開く。主も妻も無口なれば、この花の吾が家に開く
は宜なりけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。碧幹亭々として、些の邪
なく、吾が如く直かれと教ふるに似たり。梧葉と手水鉢の

廣うして

側なる八手とは、葉廣うして、吾が家の雨聲を多からしむ。
李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、
與へて喜ぶ男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つくく、ぼふしの聲に世はいつしか秋に入る。
もえ。植ゑ。

つくく、ぼふしの聲に、世はいつしか秋に入りて、山茶花
咲き、三尺ばかりの楓も紅にもえ出て、たゞ一株前の家主の
植ゑ残したる黄菊も咲き出づ。名苑の花美しといふとも、
秋の哀閑寂の趣は、却つて吾が庭の一枝にあるべし。蛻巖
の翁なりせば、獨憐細菊近荆扉。とや吟ぜん。恥づらくは、
海内文章落布衣。と唱ふべき身にあらざるを。

蛻巖
本名梁田邦美、
詩人、明石藩兵
庫縣の儒臣、
寶曆七年(四七)
歿、年八十六。
獨り憐ム
蛻巖の詩。
かぐや姫
赫耶姫 竹取物
語の主人公。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして満樹金よりも黄なり。
木枯の風起れば、かぐや姫の扇にせまほしきその葉、翩

紅葉さへ、
寸金と人はいふ
なる錦を吾は庭
に敷きぬ。

々として翻り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて
戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢
も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金
と人はいふなる錦を吾は庭に敷きつめぬ。
木の葉落ち盡くしてはさすがに淋しげなるも、日影、月影
愈、多くなりて、空を見、星を見るに障り少きは嬉し。

〔自然と人生〕

瑛樹連雲秋色飛
登高能賦今誰是

獨憐細菊近荆扉
海内文章落布衣

(九月九日 蛻巖)

二五 國史に返れ

徳富蘇峰

徳富蘇峰

史學者

文學者

名は猪一郎

貴族院議員

熊本縣の人

文久三年(五三)

生

「國史に返れ」日本國の歴史は大和民族の系圖である、吾人の祖先の考課表である、日本帝國の寶庫である、日本國民の經典である。日本國を知るには、國史を透して知るより外に方便がない。國史は實に忠實な案内者、信賴すべき指導者である。

吾人は歴史的に考慮せねばならぬ。總べての人類は、平等觀よりすれば皆同胞である。併し歴史觀よりすれば、總べての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは

吾人

箇(個)

全う(く)される

干渉

同じでなく、乙國と丙國とは違ひ、さうして丙國と甲國とも亦同じでない。十箇國あれば十箇國の相違があり、百國あれば百國の差異がある。此の特殊の國性を維持するに於て、始めて獨立國の意義が全うされる。獨立國の本義は形式的に、他の干渉を絶ち、我が自主の體面を保つだけでなく、精神的に自主であらねばならぬ。詳に言へば、精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展し、發達させねばならぬ。

我が大和民族の誇りは日本の歴史である。此の歴史の中には、必ずしも悉く皆正しい事、善い事ばかりが満ちてはゐない。必ずしも悉く敬ふべく仰ぐべき事ばかりが溢れてはゐない。人間の所作には、さまざまの過失もあれば罪

悪もある。併し、總括していへば、日本の歴史は決して大和民族の恥辱史ではなく、光榮史である。

如何に日本の皇室が世界に比類のない有難い皇室であるかは、國史が最も雄辯にこれを語つてゐる。如何に日本の國民が、其の一旦緩急の際に處して、護國の精神に猛烈に且つ勇敢であつたかは、國史が其の證人である。如何に大和民族の中に、世界的偉人と比較して一步も劣らぬ者、即ち彼自身また世界的偉人と稱するに足る者を生じたかは、長い年代の中に屢々接觸した所である。即ち我が明治天皇の盛徳大業も、國史の背景によつて、始めて明白に、精詳に、剴切にこれを會得することが出来る。國史の背景がなかつた

三ノカニニ
ソレニラフ
乾
乾
乾

ならば、五箇條の御誓文の如きも、一種の雄快な文書たるに止るだらうし、帝國憲法の如きも、單に乾燥無味な一部の法文に止るであらう。

凡そ固陋、頑冥な戀舊思想や、保守、退嬰な島國根性や、若しくは、詭激、狂妄な赤化主義や、架空、浮誇な模倣精神は、何れも我が國史を閑却することから起るのである。現状を株守するのにも國史を知らないがため、現状に不安を感じるのにも國史を知らないがため、國民的自信力を失墜するのにも國史を知らないがため、自惚根性で醉生夢死するのにも國史を知らないがためではないか。

「國史に返れ。」とは、總べての國民が歴史家となれと言ふの

條(条)

株守する

宋人田をたがやす者あり。田の中に株あり。兎走りて株に觸れ、頸をくじきて死す。因りて其の未をすて株を守り、また兎を得んことを冀ふ。兎はまた得べからずして、身は宋國の笑ひとなれり(韓非子)

筋筋

ではない。それには専門の學者がある。たゞ日本國民として、日本の歴史の大いなる筋道を諒解せよと言ふのである。此の歴史は、精神的に於ける日本の潜在して居る寶藏である。苟も國民的に生活し且つ活動しようとするならば、先づ此の寶藏に向つて總べての物を求めるがよい。

國民小訓

純正國語讀本 卷三終

第二回
王内子
岡保憲

昭和十二年七月廿五日印刷
昭和十三年七月三十日發行
昭和十三年七月三十日發行
昭和十三年七月三十日發行
昭和十三年七月三十日發行
昭和十三年七月三十日發行
昭和十三年七月三十日發行
昭和十三年七月三十日發行
昭和十三年七月三十日發行
昭和十三年七月三十日發行

純正國語讀本改訂版
各卷定價金六十錢



編纂者 五十嵐 力
 發行者 山田 謙 吉
 印刷者 五十嵐 良 晃

發行所 東京市牛込區原町二ノ四六

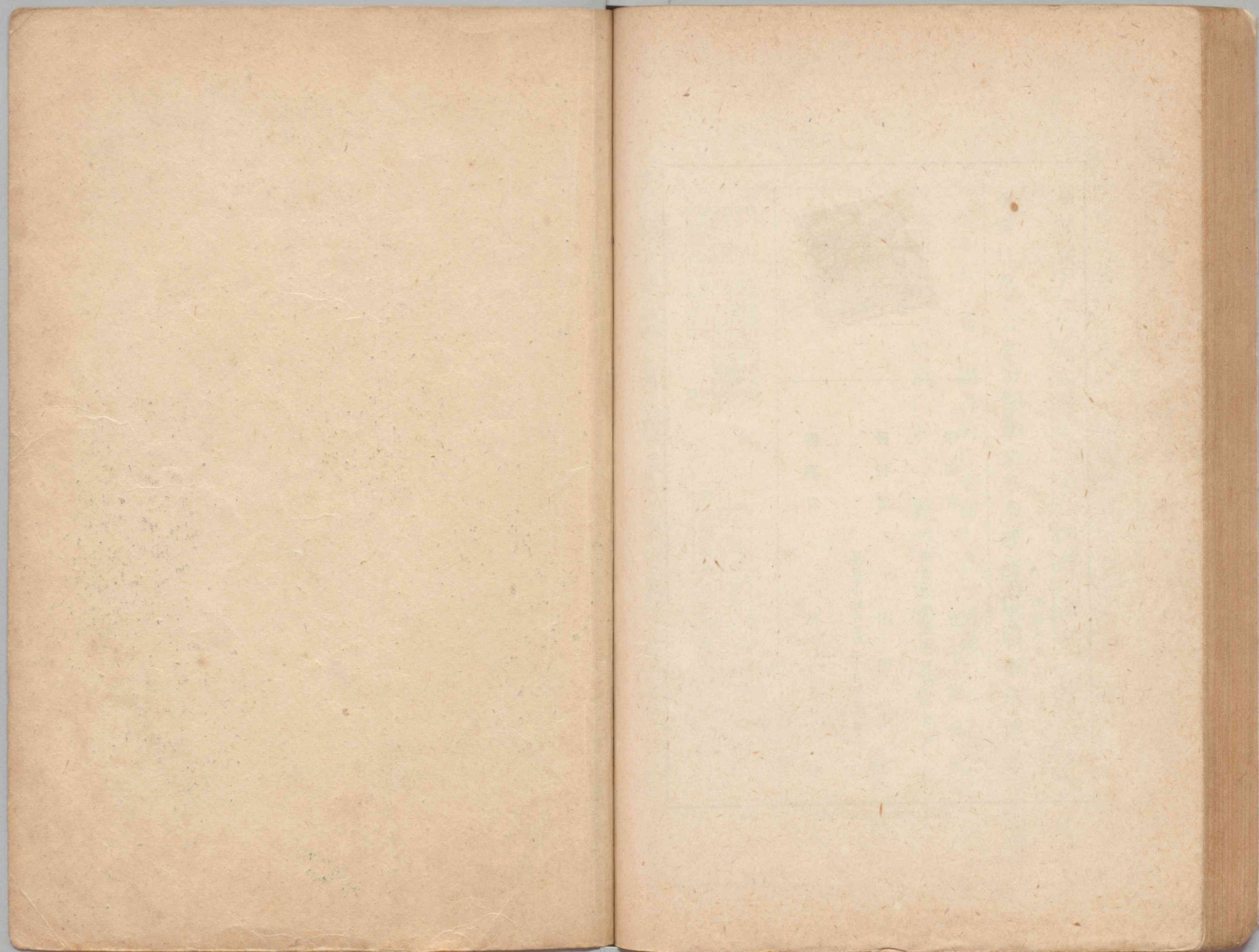
早稻田圖書出版社

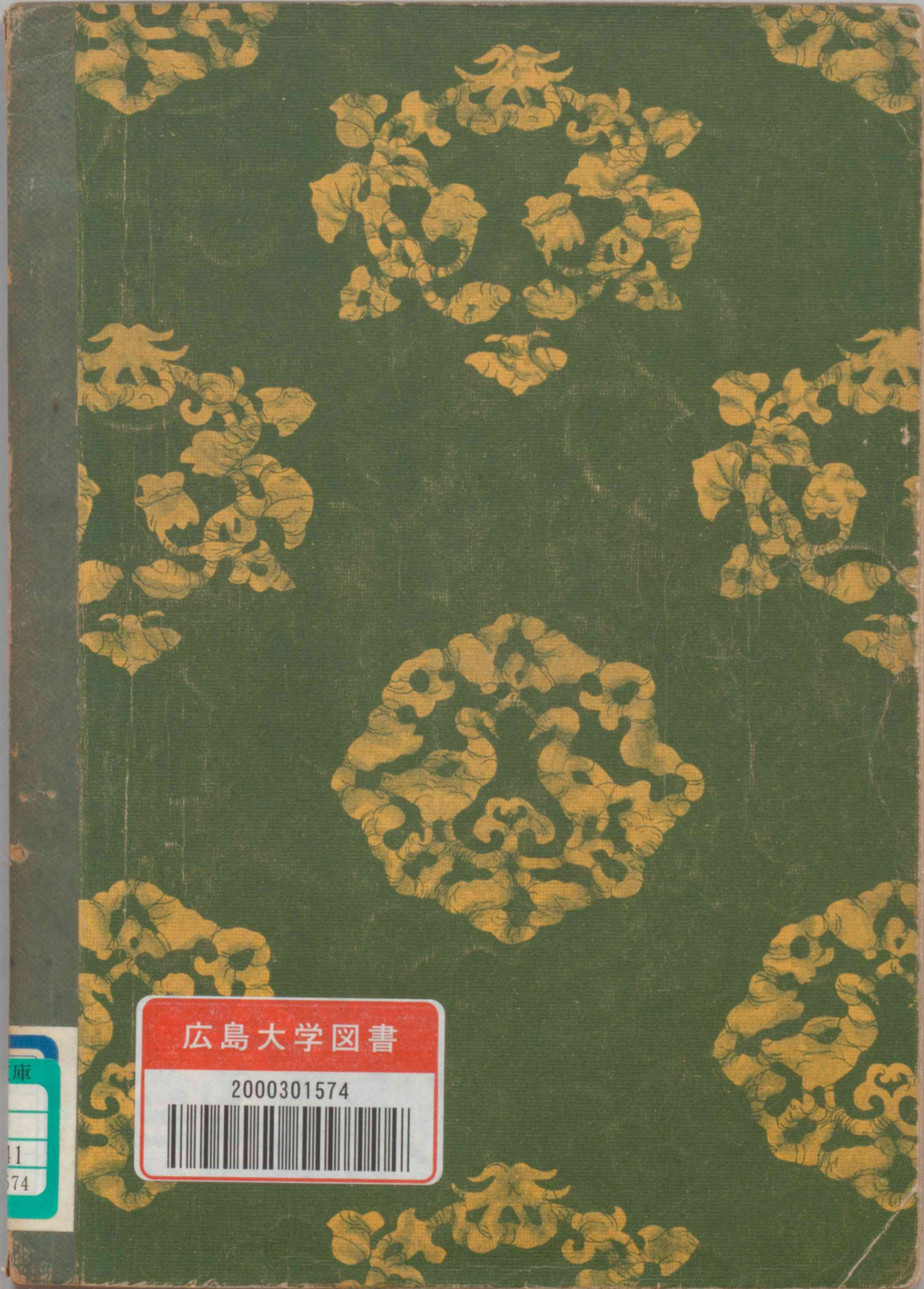
配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

振替東京一三六一五三番





庫
1
74

広島大学図書
2000301574

